

---

法少女リリカルなのは

ハーレム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ

安眠枕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ハーレム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ

### 【Nコード】

N5893J

### 【作者名】

安眠枕

### 【あらすじ】

俺は平凡でのんびりとした生活がしたかったのに、何でいつも厄介事に足突っ込んでしまうんだろうなあ。「それが兄貴っすよ」「まあ……確かに」「頑張ってくださいマスター!!」「……はあ。これは主人公っぽくない主人公のお話。 作者は魔法少女リリカルなのはをアニメでは殆ど見ていませんので、もし間違いがありましたら教えて下さい。誤字脱字の報告もよければお願いします。

あれ？いつの間にかPV1000000越えてる？

## プロローグ（前書き）

「はじめまして作者の安眠枕です」

「主人公の京平です」

「この小説は原作キャラが崩壊するかもしれないので気をつけてください」

「何故なら作者はアニメを殆ど見ていません。知識の殆どが二次創作からです」

「いや、一話と最終回は見たぞ」

「それだけじゃ無理だろ!!」

「なんくるないさ〜」

「……最初から不安定ですがよろしくお願いします」

「では魔法少女リリカルなのは ハーレム？チート？プラグ乱立

？そんなのは全部あいつがやる事だ」

「始まります……それにしてもタイトル長いな、おい！」

## プロローグ

「ああ……今日だけは平穩無事な日々が過ぎせると思ったのにな……甘かった……」

いつものようにそんな事を愚痴る俺、菅原スガワラ 京平キョウヘイは目の前に倒れている女性に目をやる。

……まあどう考えても地球のお人じゃないらしい。だって髪の色は絶対染めたらそんな色にはならないだろうってぐらい綺麗な銀髪で腰まであるロングヘアーだし、なんか今は夏の筈なのにボロボロの暑そうな黒いロングコート着てるし、顔は……髪で隠れてるけどこの場合って大抵綺麗なんだろうなあ。ま、どっちでもいいけど。

「さて、こんな時こそ……あつた、あつた」

不思議な事に、こんな如何にも厄介事に巻き込まれますよ状態の時には、俺のポケットに道標となるあるカードが入っているんだなこれが。

「ライフカード」

某あの青い国民的アニメの狸さんを真似してカードを出す。あれ？あの狸って元は猫だったけ？……まあ、いいや。

「どれどれ……」

早速取り出した五枚の青いカードをしてみる。

「……ほう珍しい」

全部のカードに関わるな逃げろ！って書かれてある……あはっ  
じゃあ逃げよ

「……う……う……あれ？ここは？」

俺が見事なまでのクラウチングスタートをきろうとする直前に、  
まさかの女性が目を覚まして上半身だけ起こして周りを見渡す。あ、  
やっぱり美人さんだ。それも超がつく。

「あなたは？」

余りに唐突に起きるもんだからスタートをきれなかった俺は女性  
と目があつた。黒い瞳に潤んだ唇、優しそうな物腰で抜群のプロポ  
ーション……いや胸がほんの少し小さいな。

「何か失礼な事を考えていませんでした？」

まさかの読心術！こりゃあ驚いたな！

「いえ、滅相も無い」

「そうですか……それよりここは？」

「ここ？そりゃあ日本ですよ」

「日本？じゃあミッドチルダでは無いのですね？」

ミッドチルダ？何そのアニメとかで出てきそうな名前。

「この地球にはそんな地名は無いと思うのですが？」

「地球？……では、ここは第97管理外世界なんですね」

第97管理外世界？確かそんな事を言っている奴が……ああラットル君が言ってたな。じゃあこの女性はラットル君と同じなのか。

「それで」

「うん？」

「あなたは何をしているのですか？」

女性の言葉に俺は自分の姿を思い出す。あ、そっぴや俺クラウチングスタートの格好のままだった。

「見ての通りクラウチングスタートですが？」

「いや、それは分かるのですが何故そのような格好を？」

「そりゃあ」

俺はそこまで言うと腰を上げる。今の俺はさながら陸上選手のようだ。そして女性に顔を向け笑顔で言っっちゃった。

「厄介事を背負わないためですよ」

スタート！

「おりゃあああああ！……！」

速く！音よりも速く走るんだ！そして我が家に帰るんだあああああ  
あああ！……！！

「あああああ！……うん？」

走っていると背中に嫌な汗が流れる。この感じ……まさか！？俺  
は恐る恐る後ろを振り返る。

「待つてくださああああいいいい！……！」

「嫌あああああ！……！」

何故だ？スタートは完璧だった筈だ？なのにどうして！これが小  
学生と大人の超えられない壁なのか！？

「くそっ！……このままじゃ追いつかれる！……！」

追いかけてから十分がたとうとしていた。流石の俺も疲労が見え隠れしてきた。それなのにあの後ろの女性ときたら。

「どうして厄介事なんですかあああああ!!」

めちゃくちゃ大きな声で叫びながら俺を追いかけてくる。俺のフエイントもきかなかつたし、人の密集地に逃げ込んだのにまるで蛇みたいに人と人との間をすり抜けてくるし、化け物か!?

「はあ……どうしたもむっ!!」

神は俺を見捨てたのか!!前方からアイツとその取り巻きの三人組の女子がこっちに向かって楽しそうに歩いてきやがる!!

「マズい、コレは非常にマズいぞ……」

呪文のように呟く俺。コレが前門の虎、後門の鬼か。

「から、ん？」

ヤバい!アイツがコッチを見てる。めちゃくちゃ見てる。

「やっぱり！京平、お前よくも！！」

アイツ、炎ホムラ 九龍クリユウが怒りを露わにしながら走ってきた。しょうがないので俺は一旦立ち止まる。

「おいおい、どうした九龍。そんな怖い顔して」

「うるさい！！何で約束を破った！！今日一緒に帰ると約束したよな！！」

「確かに今日の放課後、一緒に帰る約束はしたが、まさかあの取り巻き達がいると言わなかったお前が悪い」

「何だよ、それ！！じゃあみんなで仲良く帰ればいいじゃないか！！」

はあ、この鈍感モテモテ野郎が。そんな事したら俺が死んじまう。ほら、後ろ見てみる。聖洋大付属小学校の三天使様が俺を殺すような目つきで見てやがる。

「ほら、九龍！さっさと行くわよ」

右端の金髪でまさにわがままお嬢様のようなアリサ・バニングスが不満そうな顔で九龍にそう言う。学校でのあだ名は【金髪の女王】。そのまんまだな。

「今日は私達の買い物に付き合ってくれていいましたよね」

今度は左端の紫色の髪をしたアリサとは真逆の雰囲気を持つ月村ツキムラすずかが笑顔で九龍を見つめる。あだ名は【紫式部】。

俺の中では一番敵に回したくない人間No.1だ。だって優しそ  
うに見えて実は怖そうだし。

「にやはは。そうだよ九龍君行こうよ」

最後に真ん中にいる茶髪で屈託の無い笑顔を九龍に見せ、その手を掴んでいる高町タカマチなのは。あだ名は【桃色の癒やし】。俺は癒された事なんか一回も無いがな。

「よし、じゃあ約束を破った罰として「だが断る!!」まだ全部言  
つてねえ!!」

お前の事だから約束破った罰として京平も来い。とか言うつもり  
なんだろう？だが俺には断るちゃんとした理由がある。俺はチラッ

と後ろを見る。そこには何が起きているか分からなくて困惑している女性の姿が。うっし、念話してみるか。

《すみませんが念話は出来ますか？》

《えっ！？あ、はい…》

《じゃあ私の話にあわせて下さい。そうしてくれたら貴女を匿ってあげましょう》

《っ！！なんでそれを！》

《そんな服装で倒れていたら大体予測はつきます。安心して下さい。私は貴女のような人を後二人匿ってますから。分かりましたか？》

《……はい、お願いします》

《では、行きますよ》

そこで念話をやめて、俺は後ろの女性を指差す。

「残念だが約束を破ったのはもう一つ訳があつてな。あの女性なん

だが……実は俺の親戚にあたる人なんだ」

俺がそう言うのと女性は九龍に向かって律儀に頭を下げる。それに対して九龍もどうも、と言って会釈をする。なかなか、やるじゃないか。

「それで俺はこの人を家に連れて行かなければならないんだ。だからお前との約束を破ってこの女性を駅まで迎えに行かなきゃダメだったんだ。分かったか？」

「……なる程な。それならしょうがない」

九龍は残念そうに溜め息を吐く。ふふふ、計画通り！！

「じゃあ、俺は案内の途中だから」

残念そうにしている九龍にそう言い残ると俺は女性の手をひいて、自分の家に針路をとり早足でその場を離れた。

その場を離れた後に、気のせいかもしれないが九龍の悲鳴らしき声がどこからか聞こえた。南無三九龍。

## プロローグ（後書き）

「どうでしたか皆さん」

「はあ……平和が欲しい」

「京平、安心しろ。これからもっと厄介事が増えるぞ！」

「うっせえ！笑顔でサムズアップするな！」

ボキッ！

「あぎやああああ指があああああああ！！！」

「ったく……それではまた次のお話でお会いしましょう」

「痛いなあ畜生」

## キャラ紹介（前書き）

「ここでは、京平と九龍を紹介をします」

「ネタバレの部分が沢山含むので嫌なら見ない方がいいかもな」

「おい、京平！読者の方に失礼だろ！」

「げっ！九龍なんでここに！もしかして安眠が招待したのか？」

「そんな事をするわけ無いだろ！！で、何で来たの？」

「はあ？だってこの作品って俺が主人公だろ？」

「……はいはい、凄い、凄い（棒読み）」

「な、何だよそのやる気の無さは」

「さてこんなナルシストは放っておいてさっさと始めますか」

「おい、誰がナルシストだって？」

「そうだな。魔法少女リリカルなのは　ハーレム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ」

「始まります」

「無視するな！！」

## キャラ紹介

スガワラ  
菅原 京平 キョウヘイ

性別 男

身長 145cm

体重 35kg

年齢 9歳

学校 私立聖祥大付属小学校3年生

成績 中の下。

容姿 日本人特有の黒髪に黒い瞳。耳にかからない程度の長さのボサボサの髪をしている。目つきはいつもダルそうな感じ。

友達関係 良くも無く、悪くも無く。

性格 めんどくさがり屋。戦いや戦闘は絶対にしたく無いらしい。何故ならめんどくさいから。

七夕に書いた願い事 九龍がどうか違う世界に行ってくださいように。

魔導師ランク 本人曰わく陸戦B+がいらしい(だが実際はSS

Sオーバーのレベルは持っている)

術式 ほんの少しだけミッド式が使える。

本作の主人公であり、洋菓子店‘HOME’の店長兼料理人。いつも親友の九龍に振り回されており、いい加減平穏な生活をしたいと夢見ているかわいそうな小学3年生。元々は魔力が全く無い普通の少年だったがリミッターデバイスを捨てた事により魔力を持つようになった。その時、本気で死にたくなったらしい。

家族は父と母がいるが二人とも考古学者なので、世界中を飛び回っている。それに対しては京平自身なんとも思っていない。

現在はとある事情により三人の居候が京平の家に住み込んでいる。最初はとても落ち込んでいた京平だったが、今はまんざらでも無さそう。

## デバイス紹介

リミッターデバイス：アイギス、オハン、イージス。

インテリジェントデバイス：紫月<sup>シゲツ</sup>

ユニゾンデバイス：ラットル・アンサー、ラスカ・ニコロフ。

京平が小学1年生の時に家族で遊びに行っていた海で拾ったのがリミッターデバイス。それはアルハザードよりもっと古くに作られた【神の三盾】カミノサンヘキと呼ばれる伝説のデバイス。詳しい事は無限書庫にも無い。大抵はキーホルダーとして腰に短めのチェーンでつけている。アイギスは円形の盾、イージスは三角形の盾、オハンは西洋大剣の形をしていて、暇な時の京平の話し相手として使われている。ちなみに人間の姿にもなれるらしい。

性格は本人曰わくアイギスは頼れるお姉さん、イージスは知的なおじさん、オハンはのんびり屋の兄さんらしい。

紫月は京平が2年生の時に公園の砂場で拾ったデバイス。待機状態はビー玉ぐらいの大きさの紫色の玉。いつもは京平のカバンのストラップになっている。

性格は本人曰わく、優しいお母さん。

ユニゾンデバイスの二人は現在、京平の家に住んでいる居候。とある事情により京平に匿って貰っている。二人とも京平の事を家族と思っている。いつもはラットルはアルバイト、ラスカは近くの大学の講師をしている。

ホムラ  
炎 クリコウ  
九龍

性別 男

身長 148cm

体重 37kg

年齢 9歳

学校 私立聖祥大付属小学校3年生

成績 常にトップ。

容姿 名前を表すような濁りのない赤い髪で黒い瞳。髪は肩にかかる長さでいつもは一つに纏めている。目つきはキリツとしていて正にイケメン。

友達関係 女子にはモテ、男子には怨まれる存在。（だが男子の中にも九龍を好きな者が少数ながらいるらしい……）

性格 優しいの一言につきる。相手が女性なら優しさが1、5〜3倍近くに膨れ上がるらしい。だが恋愛には鈍感。怒ったら京平も裸足で逃げる程に怖い。

七夕に書いた願い事 みんなが幸せになれますように。

魔導師ランク リミッター状態AAA+（解除時SSオーバー）

術式 ミッド式、古代ベルカ式

レアスキル  
希少技能 魔力資質変化‘劫火’

チートな能力を持ち女性にモテモテの主人公の親友。九龍の持つ‘劫火’とは、魔法でも質量武器でも何でも塵にさせる。

京平とは幼稚園からの知り合いで、いつも京平を巻き込んで人助けをしていた。

家族は赤ん坊の時に次元犯罪者に殺される。しかし、その後すぐに駆けつけた時空管理局員に助けられた。

助けられた後、魔法の素質があるという事で、その管理局員の下で育てられ、結果、時空管理局の中で『黒き滅炎者』という痛々しい二つ名をつけられるぐらい強くなった。

現在はユニゾンデバイスのサラとインテリジェントデバイスのインフェルノの三人で暮らしている。友達が傷つけられるのをとても嫌がり、もしそんな事をするような輩がいたら2秒でフルボッコである。ちなみにお金は山のようにあるのでアルバイトはしていない。

## デバイス紹介

インテリジェントデバイス：インフェルノ

ユニゾンデバイス：サラ

インフェルノは両親の書斎で見つけた物で、待機状態はビー玉ぐらいの大きさの赤い玉。いつもはネックレスのように紐をつけて首にかけている。

性格は頼れる兄弟。

ユニゾンデバイスのサラは小学1年生の時に公園で倒れている所を学校から帰っていた京平と九龍が見つけ、その時にサラは九龍に一目惚れ。

今では九龍に恋する乙女の一人である。

## キャラ紹介（後書き）

「つ、疲れた……」

「よく頑張ったよ。安眠」

「こんなので疲れるなんて、これから大丈夫か？」

「「うつさい！死ね！！」」

「酷っ！！」

「それにしても安眠」

「ん、何？」

「俺が中々にチートだと思っただが？最初はそんな設定じゃ無かったんだろ？」

「安心しろ。戦うのは大抵なのはと九龍だから。お前の戦闘シーンは殆どは考えて無いから」

「マジで！ありがとー安眠」

「いや、それはいいのか？」

「「黙れ男の敵が！！」」

「俺なんかした！？」

「さて、そろそろお開きにしますか」

「そうだな。じゃあまた次の話で」

「じゃあな」

「「お前、もう来んな！！」」

第一話 「主人公、フラグを建てる！」 「建たせねえよ！！」 (前書き)

「あゝ、ネタが浮かばない。何故か三期のネタしか浮かばない」

「三期つて……まさか安眠、三期までこの小説書くつもりなのか！？」

「予定としては」

「一体何年かけるつもりなんだ、全く……」

「まあ三年以内には何とかしたいとは思ってるんだが」

「いや、無理だろ。そっぴや九龍は？」

「なのは達を呼んで連れて帰って貰った」

「……九龍、頑張って生きろよ」

「じゃあこの辺で終わりにしますか」

「そうだな。それでは魔法少女リリカルなのは　ハーレム？チー  
ト？フラグ乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ」

「始まります……やっぱり長いタイトル」

第一話 「主人公、フラグを建てる！」 「建たせねえよ！」

……さてさて一番めんどくさい奴もまたし、後はこの女性だけだな。俺は隣で歩いている女性をチラッと横目で見る。うん……本当に綺麗だな。ラスカとは違った綺麗さだ。こうなんというか……清楚って感じ。

「あ、あの〜」

「ん？何か？」

「その……そんなに見られるのは恥ずかしいと言っか……」

恥ずかしそうに顔を赤らめてそう言う女性。いやあ、こう言うのが癒やしなのかね。どっかのツインテールとは大違いだな。

「ごめん、ごめん。貴女みたいなタイプは身近にいないくて」

俺の周りにいる奴って言えばあのハーレム野郎といつもハイテンションなラットル君と家に帰ってくるや否や「癒やしよ〜!!」「つと叫びながら俺を抱きしめるラスカしかいねえしな。……あれ？マ

トモな奴が一人もない。

「タイプ、ですか？」

「そうそう。何？癒やしって言うのかな？」

癒やし？つと云つて不思議そうに首を傾げる女性。何だろ。自分より大人な筈なのに、頭を撫でてあげたい。こんな癒やし系の女性から逃げていた自分に2時間程説教してやりたい気持ちになった。

「そう言えば、貴女に一つ聞きたい事があるんですが、かまいませんか？」

「別に良いですけど……」

「よかった。なら貴女の名前を教えてくださいませんか？」

「私の名前……ですか？」

「はい。いつまでも貴女じゃ嫌でしょう？」

まさか名前が無いとか言っくんじやないだろうな。

「その……あの……」

困ったような顔をして女性は言葉を詰まらせる。もしかして警戒されてる？どうして？……あ！そう言えば俺の名前まだ教えて無かった。

「すみません。先に此方から名前を言うべきでしたね。自分の名前は菅原 京平と言います」

俺はそう言って頭を下げる。これで名前を言わなかったらもう泣くよ。

「あ……丁寧にありがとうございます。私はフィーネ・ランバルトと言います。気軽にフィーネと呼んで下さい」

よし！ミッションクリア！

「フィーネさんですか」

「フィーネで良いですよ」

いやいや、明らかに自分より年上の人を呼び捨てるのはちょっと……。「家族の一員」になるのだったら話は変わるけど。

「あの……私もキョウウヘイさんに質問があるんですけど宜しいですか？」

「別に構いませんよ。ただし答えられる範囲ですが」

「じゃあ……キョウウヘイさんは魔導師なんですか？」

「ノーコメントで……」

「即答……!」

いやあ……。ボケるのって気持ちいいなあ。

「嘘ですよ。自分はそんな凄い物じゃあ無いです」

「えっ!でも念話を使ってたじゃないですか」

「自分が使えるのはそれと少しばかりの回復魔法ぐらいですから」

ラットル君にも「兄貴が魔導師になるには一億年と二千年から愛してるーぐらい遠いっす！」って言われたし。確かに遠い。

「じゃあその魔法は誰から教えて貰ったのですか？」

「さっきほど念話で言っていた居候の二人ですよ。いつもは二人共働いているんで、暇な時に教えられました」

「教えられた？」

「はい。元々、魔法つという摩訶不思議アドベンチャーの力なんて知りたく無かったのですが、なんか「デバイスを持っているのに魔法を知らないなんてダメすぎるっすよ兄貴！」とか「魔力とデバイスを持つてるのに魔法を使わないなんて……京平！それを宝の持ち腐れって言うのよ！！」などと説教されまして……」

まさか暇な時の話し相手になつてくれた奴らがそんな凄い物だとは思わなかったなあ。でも、たまに人型になった時はマジでビビった。

「デバイスも持ってるんですか!？」

「デバイス」の言葉にフーネさんが目を丸くして驚く。やっぱりデバイスって凄いのか……でも、そんな凄い物が海にゴミと一緒に打ち上げられたり、公園の砂場に埋まっているこの国ってどうよ。

「それで今持つてるんですかデバイス!!」

あれ？フーネさん、めちゃくちゃ目をキラキラと輝かしてるんですけど？もしかしてデバイス大好きっ子？

「残念ですが、今日はその居候の片方にメンテナンスして貰ってるんで家にあるんですよ」

俺が苦笑いしながらそう告げるとフーネさんは俺の肩を掴む。それはもう活き活きとした目で。

「じゃあキョウヘイさんの家に早く行きましょー!!」

分かりました。だから手を離して下さい。肩が壊れそうです。

「わ、分かりましたから落ち着いて」

「　　」

鼻歌を歌いながら俺の後ろに周り背中を押すフーネさん。早く案内しろって事ですね。分かります。

「……はあ」

今日一番の溜め息を吐いて、少し早足になりながら俺は我が家へと向かった。

……それから10分後。

「つきましたよ」

「へえ、ここがキョウヘイさんの家ですか。中々シンプルでいいですね」

フーネさんは俺の家を見て率直な感想を述べる。住宅街に囲まれた場所にぽつんとある二階建ての真っ白い家に、'HOME'と書か

れた黄色い小さな看板が入り口のドアノブにかけられてある。一階部分は主に洋菓子店として少しばかり改築し、二階部分は普通の家になっている。

「これってどついつの意味ですか？」

ドアノブにかけられている「HOME」の看板を見たフーネさんは首を傾げる。

「それは「家族」って言う意味ですよ」

「家族……いいですね」

フーネさんは寂しげな声でそう呟いた。やっぱり訳ありのよう。

「フーネさんどうかしましたか？」

「あっ！いや、何でも無いですよー！」

何でも無い筈が無いでしょ。ほら、目が少し潤んでるし。でも……。

「そうですか。なら入りませんか？もう暗くなってきてますし」

理由は聞かない。なぜならフーネさんは赤の他人だ。身内でも無いのに過去を無闇に聞くのは失礼だろう。それに聞いたら、今より益々めんどくさくなりそうな予感がする。

「そ、そうですね」

フーネさんは少し無理をして作った笑顔でそう言つと俺の後ろにピッタリとくっつく。懐かれた？

「少し近付きすぎでは？」

「いいじゃないですか」

何故に嬉しそうに答える。何もしてないよな俺？フラグとか建てた覚えなんてこれっぽっちも無いぞ。

「……はあ」

こんな所で考えてもしょうがないし、中に入るか。入り口はお店

開けてないから閉めてるので、裏口からいつものように入った。

第一話 「主人公、フラグを建てる！」 「建たせねえよ!!」 (後書き)

「……………」

「……………」

「なあ安眠……………」

「どした京平？」

「俺にはフラグ建てねえって約束したあの日を覚えてるか？」

「覚えてるとも。その後にとっかの豆腐屋の車とレースして勝った事まではつきりとな！」

「いや、そこまでは知らないが……………これはどっいつ事だ」

「何が？」

「フーネさんの事だよ！何かフラグ建ってるじゃねえか！」

「はあ？何言ってるんのお前？」

「ふえ？」

「あれは恋愛フラグじゃねえよ。安心しな」

「恋愛フラグ？」

「フラグにもいっぱい種類があるんだよ。死亡フラグとか死亡フラグとか死亡フラグとか」

「死亡フラグしか言ってるねえ！」

「それに俺は恋愛フラグという奴は大嫌いだからな。そんなのは全部九龍持ちだ」

「あ、安眠……」

余りの嬉しさに涙をこぼす京平。

「……まあ時期がたてば建たせるけどな」

「ん？何か言っただか安眠？」

「いんやあゝ何も。さてここもそろそろお開きにしますか。グダグダだし」

「何か気になるがまあいいか。それじゃあ皆さん」

「バイバイ」

第二話 「主人公、貞操を奪われる!!」「奪わせねえよ!!」「(前書き)

「もう……疲れたとです……」

「大丈夫か？」

「バイトが忙しくて中々更新出来んかってん」

「いや、朝はバイトねえだろ」

「朝は眠たい。頭回らない。イコール夜に更新」

「知らねえよ。読者の方は更新楽しみにしてんのに」

「楽しみにしてる人っているの？」

「いるわ!!まったくそろそろ始めるぞ」

「うーい、魔法少女リリカルなのは ハーレム？チート？フラグ  
乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ」

「始まります……なめ題名変えねえ？」

「やだ、気に言ってるもん」

第二話 「主人公、貞操を奪われる!!」「奪わせねえよ!!」

「ただいま」

いつものように裏口を開け少し声を強めて自分の帰宅を知らせる。玄関は靴箱とスリッパ置き場があるだけ。それに短い通路があつて、その先に階段があるような正にシンプルイズベスト!!

「シンプルですね」

「シンプルが好きですから」

そんな会話をして靴を脱いだ時に二階へと続く奥の階段からドタドタとした慌ただしい足音が聞こえてくる。来たよ、新しい問題が。

「来たか……」

俺はゆっくりと腕を捲りあげ右足を後ろに下げて、体の重心を前に倒す。端から見ればタツクルするような感じ。

「何してるんですか?」

「肉体言語…とでも言っておきます」

「はあ？」とフーネさんのどこか抜けたような声とほぼ同時に奥の階段から見えた。身長は俺とさほど変わらないが神は茶髪、瞳は緑色。服装は動きやすいように上と下に黒のジャージを着た格好いいというより可愛いに近い少年。もといバカ。

「兄貴iiiiiiii!!!!!!」

大声でそう叫びながら突っ込んでくるバカ。まったく近所迷惑を考える。

「俺っちの愛をっけごほっ!!!!!!」

バカが言い終わる前に俺は前に走りだし、L字にした腕を少年の首に思いつきりぶつける。これぞ秘技ラリアット!!!

「お前の愛など受け取りたく無いわ!!!!!!」

「あ………に………き………」

「ふんー!!」

「ぶっ!.....」

まだ脈があつたので仰向けに倒れているバカの鳩尾にチョップを入れてやる。これで当分は起きないだろ.....多分。

「え〜.....これはどこから聞いたらしいのか.....」

余りのショッキングな映像を見せてしまったフーネさんは困惑した表情をしていた。しょうがないので事の経緯を話す。

「コイツはラトル・アンサー。もといバカ。もとい変態。もとい男色家」

「失礼な!!俺たちは兄貴しか見てないっすよ!!」

「まだ息してたか、この!!」

もう一度鳩尾にチョップを放つとまたバカは寝始めた。その時に誤って肋骨にチョップが当たりボキッって音がしたけど.....ラトルだからまだ生きてるでしょ。確信?だってコイツ鼠だし。紫月で

も死ななかつたし。

「話の途中ですみませんでした。コイツはどうも俺の貞操を狙っているらしく。こうやって帰ってくるたびに襲ってくるんです」

「俺たちは……貞操じゃなく……兄貴の心が……」

「残念。それはモンキーパンチと宮崎さんの最強タッグでも無理だわ」

「いや、カリ○ストロはル○ン史上最高の作品でしょ。つと、それは置いといてもう一度バカを眠らせる。ほんとに不死身だなこの鼠。」

「と、とにかくこの人が居候さん何ですね」

「ああ、それと自分の魔法の師匠の一人です……」

「このラットルにはどんだけヤバい事をされそうになった事が……魔法の練習つす!!」と言いながら、バインドをかけてズボン下ろされそうになったし……それに……あ、思い出したくない!!  
!!

「大丈夫ですか？顔が青いですよ？」

「はい。昔のトラウマを呼び起こしそうになったただけですから……」

「いや、ダメじゃないですか！……！」

俺が軽く鬱になりかけていた時、奥の階段から足音が聞こえる。

ラットルのようにドタドタとは無くゆっくりと落ち着いた足音だ。

「お帰りなさい、マスター」

そう言って降りてきたのは、金髪で瞳が赤く髪をショートボブにした、どこかクールな感じのする女性。

この女性の名前はアイギス。俺の持っている四つのデバイスの一つである。普通はキーホルダーみたいな飾りになっているのだが、たまにこんな風に人型になる。しかし、何故だろう。

「ただいまアイギス。一つ質問してもいい？」

「はい、何でしょうか？」

「その服……何？」

今アイギスが着ているのは黒いフリフリのコスロリ服。どう考え  
てもアイギスが着るような服では無い。

「これですか？オハンがこれを着ればマスターが襲って来るぞと言  
ったものですから……つい……」

「何？アイギスは俺に襲われたいの？」

「はい！！私はドMですから！！！！」

「そんな力強く頷かんでいいわ！！それに俺にそんな趣味は無いと  
言ってるだろうが！！！！」

「今だけですよ、マスター。近い将来マスターは紫月で私の服を破  
いてそれから」

恍惚の笑みを浮かべどこか遠くの方を見ながら暴走するアイギス。  
はあく、いつもなら頼りになるのにこうなったら手のつけようが無  
い。それに紫月を貴様の服を破くのに使いたく無い！！

「あゝ……」

おっと、フーネさんを忘れてた。

「え〜と、この女性が俺のデバイスの一つでリミッターデバイスのアイギスです……」

俺がアイギスを紹介すると、フーネさんは固まった。何か変な事言っただか？

「リリリ、リミッターデバイスううう！！！！」

おお！！リミッターデバイスってそんなに驚く物なの？

「リミッターデバイスと言うとあのリミッターデバイスですか！？本物ですか！？」

「え？は、はい……きっと本物です」

「…あの伝説上の物だと思われていたデバイスの内の一つがこんな田舎の世界にあるなんて…もしかしたら他の二つもあるのかも……」

フーネさんは深刻な表情でブツブツと呟き始めた。少し怖いけど

玄関にずっといられるのも困るし、かと言って客間は全部ラットル  
やアイギス達に使われてるし……しょうがない。

「ねえアイギス。彼女を案内したいからどいてくれない？」

「そしてマスターと私はっと、はいマス……彼女？」

アイギスは機械のように首をこちらに向ける。

「彼女？」

「うん、彼女」

「後ろの方が？」

「うん」

俺が頷くや否やアイギスはプルプルと肩を震わせ俯く。どったの？

「マスター……私とラスカさんがあると……言つのに……」

「お〜い、アイギスさん？」

俺の問いかけに俯いていた顔を上げる。その瞳には怒りの炎が。

「もう許しません！！！！イージス、オハン！！！」

そう叫ぶと天井と廊下の板が外れる。そこから二人の男性が現れた。両方共アイギスと同じで金髪赤眼。違うのは片方はプロレス選手のような体付きのおじさん。手には‘官能’と書かれた真っ白い小説。もう片方は中肉中背の年齢はアイギスとそう変わらないぐらいのお兄さん。手には明らかに漫画本を持っている。

「兄妹の叫びにより」

「参上したぜい」

「何してんの二人共……」

この二人も俺の持っているリミッターデバイスで、おじさんの方がイージス。お兄さんの方がオハン。

「ぬう？マスターでは無いか？」

「どつたのだい？」

「いや、俺が知りたい」

「二人共やってしまいなさい!!」

いつの間に移動したのか分からないが二人の後ろで叫ぶアイギス。その言葉に顔を見合わせ困惑する二人。

「いや……のう？」

「どつしてこうなったのか説明して欲しいぜい」

「空気でわかりなさい!!空気で!!」

「無理に決まっておろう」

「俺、早く戻ってアニメ見たいんだけどなあ」

「あゝもう!!一回しか言いませんよ!!まずマスターが」

イライラしながらアイギスはこれまでの流れを説明し始める。あいっほっといてさっさと部屋にむかうとしよう。

「フーネさん行きますか」

「……………京平さん？あの方達も？」

「そうですよ。リミッターデバイスです」

俺が何気なく答えるといきなりフーネさんが倒れた。

「えっ！！フーネさん！？」

「…………リミッターデバイスが全部揃ってるって…………あははは…………」

どうやら思考回路がショートしたようで。頭から煙だして目まわってるじ。

「…………イージスちょっと彼女運ぶの手伝って」

「承知」

「ちよっ！！まだ話は終わってませんよ」

……今日は生きてきた中で一番疲れたかも。そんな事を思いながら俺は自分の部屋へと向かった。

「リットルはどつするかい？」

「今日は確か生ゴミの日だったな」

「じゃあゴミ袋に包んで捨てとくぜい」

「ふんっへ」

第二話 「主人公、貞操を奪われる!!」「奪わせねえよ!!」「(後書き)

「そう言えばさ京平」

「ん？どつたの安眠？」

「PV10000超えたって事、読者の方に報告しなきゃいけないかな？」

「!!ちよっ!!バカ!!前書きに言えよ!!何で後書きで言うんだよ!!」

「別にいいじゃん。前でも後でも」

「よくねえよ!!読者の方々本当にありがとうございます。よかつたらこれからも応援よろしくお願ひします」

「更新は遅いけどね」

「そんな悲しい事言うなバカ!!」

「それにさあ、ユニークってどう言う意味なんだろう？日に日に上がって来てるんだけど」

「……面白って事じゃねえか？」

「そうなのかな？」

「兄貴iiiiiiii!!」

「うわっ!!ラトルが来た!!」

「ヤバイ!じゃあ読者の皆様また次の回に会いましょう」

「See you again.じゃあ逃げるぞ京平」

「おっし、行くぞ安眠」

第三話 「主人公、フーネに変わる!!」「マジで!!」「(前書き)

「この話は全てフーネ視点となっております」

「やっと私の時代がキタアアアア!!」

「いや、この話だけだから」

「ううう……酷いです……」

「それにしても安眠、今回の更新はいやに遅かったな？」

「きつと良い文章を書くために必死に悩んでたんですよ　そうですよね、安眠さん？」

「(口笛を吹いて空を仰ぐ安眠)」

「……あれ？もしかして違う？」

「ん？急に新しい情報が入ったぞ？何々……」

「……………今回は期待しない方が良い。むちゃくちゃになったから（ハート）’ですって……………」

「……………安眠どこだ？」

「逃げました！」

「追え！！早くこの話を書き直させるんだ！！！！！！」

「無理です！！時間が足りません！！！！」

「ちっ！！しょうがない、今は出しとけ！後から直させるぞー！！」

「了解しました！魔法少女リリカルなのは　ハーレム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ」

「始まります。あっ！！いたぞー！！！！」

第三話 「主人公、フーネに変わる!!」「マジで!!」

.....

.....

...

「.....ん.....ん.....は?」

皆様こんにちは。フーネ・ランバルトです。突然ですが、ここはどこでしょう?

周りを見渡すと六畳程の空間。どうやら誰かのお部屋らしいです。後見えるのは平凡な木の勉強机、本がぎっしり入れられている大きな本棚、そして私が今寝ているシングルベッド。ベッドは窓際に置かれているのでぼかぼか太陽の光が.....あれ?もう外は真っ暗でしたか、残念です。まあこのお部屋を一言で表すなら.....。

「.....シンプルなお部屋ですね.....ですが」

どうしてでしょうか?不思議と心が暖かい.....。

「……落ち着きます……つて!!そんな事より」

話がズれていました。確か私は京平さんに家を案内して貰ってそこから……あ!そっだ!!

「リミッターデバイス!!」

「急に大声をあげてどうしましたか?」

「ふえ!?!」

いつの間にか私のすぐ隣にリミッターデバイスさんの女性の方……  
たしかアイギスさんが座っていた。心臓に悪いです。

「あの〜いつから居ましたか?」

「貴女が考え事をしている時からいましたか?」

「あ、そうですね」

「そうですよ」

「……………」

「……………」

……………「気まずいです。この空気誰か変えて欲しいです。」

「……………失礼かも知れませんが、一つ質問させて貰ってもよろしいですか？」

急にアイギスさんが真剣な表情で私に聞いてくる。どうやら真面目なお話のようです。

「……………」

「ありがとうございます。では……………貴女は以前、無限書庫で働いていましたか？」

「っ！！」

「それも一年や二年では無い、もっと長い年月を……………」

「どうしてそれを!!」

無限書庫と言つのは時空管理局の一施設で、管理局の管理を受けている世界の書籍や情報の全てがストックされている、次元世界最大のアナログデータベースです。「無限」の名の通り、書物は日々増え続けます。底が見えない長い縦穴型の施設で、壁は全てが本棚となつています。内部は無重力で、広さの割に移動に然程の問題はありません。だけど余りの物量故にほぼ全てが未整理で、目当ての情報を得るにはチームを編成して年単位での調査がいるらしいです。でも私はここに来てから一度も話して無いのに、一体どうして？

「簡単な事です。私達、リミッターデバイスの事は局の中でも極秘中の極秘。知っている人は殆どいないでしょう。なのに貴女は知っていた。何故でしょう？」

「……………」

「可能性としては三つ。一つ目は貴女が私達を知る権利を持つ人物であると言う事ですが、見たところ…………それはありませんね。では二つ目。偶然にも誰かから聞いたか、風の噂で知ったか。しかしそれもありません。先ほども言いましたが私達の事は極秘中の極秘。一般人、もしくは階級が名誉元帥以下の局員が聞いた瞬間、有無も言わず死刑です。なら最後の三つ目…………それは無限書庫での閲覧…………」

そこでアイギスさんは口を閉じ、私の目をじっと見ました。きっと、今の私の目は焦りと恐怖に染まっているでしょう。ここまで知られているのなら、局員が来て私を捕まえるのも時間の問題です。私はショックのあまりアイギスさんから視線を逸らすように俯いてしまいました。

また

あの暗い閉じ込められた空間で

ひたすら本を読むしか無いのでしょうか？

また

私は

独りぼっちになるのでしょうか

「……安心して下さい」

え？

「え？」

ふと顔をあげてアイギスさんの方向に向けると、そこには優しくそ  
うに笑うアイギスさんがいました。

「私は……いや、私達は貴女を時空管理局に引き渡すつもりはあり  
ませんよ」

……何を言っているのでしょうか、このデバイスさんは？

「そ、そんな事をして貴方達に何かメリットはあるのですか？」

私の問いにアイギスさんはまた満面の笑みで私の方に顔を向けました。そして嬉しそうに口を開きます。

「無いですね 一つも」

「ならどうして!」

「簡単な事ですよ。貴女を管理局に渡した場合の方がデメリットが大きくなるからです」

「???意味が分からなくなって来ました???」

「だって考えても見て下さい。まず貴女を管理局に連れて行くという事は、管理局員と私達の中の最低一人が会わなければなりません。その時点でもう問題が起きています」

「??どんな問題ですか?」

「管理局員に会う」と言う問題ですよ。実は私達」

アイギスさんが次の言葉を言おうとした瞬間、突然部屋の扉がガタンと言って開きました。余りの突然の事でアイギスさんも、私も驚いて扉の方に視線を向けるとそこにいたのは、

「アイギス。それ以上は言い過ぎだと思っただが？」

京平さんが少し眉間にシワを寄せて私達を睨むように見ていました。正直怖いです。

「あ、マスター。いつからそこに？」

「フーネさんが無限書庫の役人だったってところからだ」

「京平さんは知ってたんですか!？」

「いや、自分は時空管理局や無限書庫はアイギス達から言葉でしか聞いた事ありませんから。まあ自分にとってはどちらでもいいことですし……」

……私の勘違いかも知れませんが、アイギスさんと私の扱いが違う感じがします。私に対してはどこかよそよそしい……。それに対して私の胸がチクリと痛みます。これは……どうして？

「それより……アイギス！」

「は、はい!？」

「フーネさんは客人なんだ……俺達の事をやたらに喋るんじゃない  
!！」

っ!!!さっきより痛みが強くなる。どうして?どうして?どうして?  
て?

「す、すいませんマスター……」

しょんぼりしながらアイギスさんは京平さんに謝る。まるで家族  
の……家族?……ああ……だからか……。この胸の痛みの原因が分  
かったような気がします。

「……京平さん?」

「?どうしましたか、フーネさん?」

そつだ…羨ましいんだ。目の前の光景が…私は一人ぼっちだった

から……だから

「……私は」

凄く欲しいと思った

「貴方達と『家族』になりたいです」

そう……『家族』を。

第三話 「主人公、フーネに変わる!!」「マジで!!」「(後書き)

数時間後……

「……」「(不動明王も裸足で逃げ出すほど怖い顔をしている二人)

「……」(その二人の顔を見ないように口笛を吹く安眠。ちなみに吹いている曲は、上を向〇て歩こう。)

「……貴様の罪を数えろ……」

「だってしょうがないじゃん!!次の話に持って行く為にはこうするしか無かつたんだもん!!」

「それでも」

「強引すぎますね」

「それにさあ、前言ったよね?夜しかネタが思い浮かばないって!

「夜はバイトが連チャンで入っててすぐに寝たかったもん!!」

「ほお……それが貴様の真実か……」

「あ、やべっ!!」

「地獄に落ちなさい!!」

「イヤアアアアアア!!……!!……!!……!!……!!」

「読者の皆さん。あんなに更新を待たせてしまって申し訳ありませんでした」

「それにグズ安眠が強引にしたいせいで、文章もおかしくなっていました」

「本当に申し訳ありませんでした」「

「も……申し訳……ガク」

「では、気を取り直して」

「また、次のお話で会いましょう」

「SEE YOU」

第四話 「主人公、どうする?」「いや、俺に聞かれても……」(前書き)

「さて、安眠。一つ聞いてもいいか?」

「更新の事か?」

「知ってたのか!?!」

「そりゃあね。作者だし」

「なら、何でこんなに遅かったんだ!?!」

「……バイトがよ。ヤバかったんだよ……」

「はあ?」

「これ以上は俺の口からは言えないな。じゃあな」

「あ、ちょっと!?!……行っちゃまった」

「マスター!!」

「ん?どうしたアイギス?」

「作者の給料明細を手に入れました!!」

「本当か!!見せてみる!!.....え?」

「平日、休日あわして180時間超えていますね.....」

「.....安眠のバイト先って飲食店だよな?」

「情報では24時間は営業して無いらしいですよ」

「.....」

「そ、それじゃあ始めるか」

「そ、そうですね」

「それでは魔法少女リリカルなのは　ハーレム？チート？フラグ  
乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ」

「始まります」

第四話 「主人公、どうする?」「いや、俺に聞かれても……」

さてさて、どうしてこうなったのかを誰か俺に教えて貰いたいのだが……無理だろうなあ。横にいるアイギスも目を見開いて驚いてるし。

「え……すみませんが、もう一度言ってくれませんか?」

「はい。私を貴方達の家族にしてください!!」

フィーネはスツゴい真剣な顔で頼んでいるのだが……何故に家族?

「あ……フィーネさん。どうして自分達と家族になりたいんですか?」

「そ、それは……」

フィーネは恥ずかしそうに口籠もってしまった。しかしフィーネ、ベツドのシートで鼻と口を隠して恥ずかしそうに頬を赤らめるのは止めて欲しい。さすがの俺でも少し胸がキュンとなった。

「マ……ス……タ……!!」

背後に強力な殺気と、恨めしい声。まあ誰が言っているが検討は  
ついているが、一応振り向いてみる。

「また浮気ですか！？そうなんですネ！！マスターは直線的な愛よ  
り、変化球を織り交ぜた愛の方が好きなんですネ！！」

ツッコミたいのはやまやまなんだが、なんかもうめんどくさい。

「じゃあ今日から私も直線から変化球に変えます！！わ、私に気軽に  
話かけないでよ！！」

「うん。わかった」

「マスターはツンデレが嫌いなのですか！？」

「さっきのどくにそんな要素があったのか、三文字で簡潔に答えて  
みる」

「気軽」

「すまんが理解不能だ」

最近になってアイギスが特におかしくなってきた。どこでコイツは道を誤ったのだろうか？

「……楽しそう」

どこか悲しげな呟きが後ろから聞こえたので振り向いてみる。まあ当たり前なんだが、ベッドの上でにっこりと笑っているフーネがいるだけ。でもその笑顔に少しだけ違和感を感じた。

「……フーネさん、それは今すぐには決められません。コイツらの意見を聞かない事にはどうも出来ませんし」

俺が優しく説明してあげるとフーネは「そうですか」って言うって窓の外を見る。その動作一つ一つがとても悲しそうだ。

「……マスター」

突然アイギスが俺に声をかける。俺はまたくだらない事でも言い始めるのかと思ったがその表情からは先程とは違って変わった悲しそうな表情をしていた。これには流石の俺も何かあるのかと感じ、真面目に聞き返す。

「どうした、アイギス？」

「……お腹がすきました」

その直後、アイギスの腹からグウ〜という良い音が鳴った。

「……急に悲しそうにするから、何かあるのかと思心配したが……  
……そんなわ!!」

「ひ、酷い!!私にとってお腹がすくというのは死活問題ですよ!!」

「お前デバイスだよな？」

「今更何を言っているのですか？」

「デバイスって飯食わなくていいんじゃないのか？」

「普通ならそうですけどマスターの料理を食べたら、もうマスターの料理無くして生きていけません!!」

俺の作る料理はアイギス達にとつたら麻薬みたいな物なのか？

「……そんなに美味しいのですか？」

不意にフーネさんが顔を上げてアイギスに問いかける。あれ？フーネさんも興味津々なのか？

「もう言葉にするのが失礼なぐらいです！！」

「いや、それは大袈裟すぎるだろ」

「いや！！マスターはこんなにも騒がしい私達がどうして食事の時だけは静かになる事に疑問を持った事はありませんか！！！」

ん〜……確かに別にそんな決まりを作ってもいないのに、食事の時は皆無口になってるな。

「それは簡単な答えですよマスター……」

そしてアイギスは俺に向かって思いつきり指差す。

「それはマスターの料理が美味すぎて、言葉が出ないからです!!」

「こらこら。人を指差したらいけないだろ」

正論を述べてやってから、アイギスの人差し指を斜め90度まで曲げてやる。

「ああん」

……やって後悔した俺がいる。

「マ、マスター、もう一度」

「やらん」

自分の誤った行動に少し反省する。そんな時、またもやグウと  
いう気の抜けた音が聞こえる。

「……またか、アイギス」

「いや、私じゃありませんよ」

「俺でも無いが？」

なら一人しかいないのだが。

「……………すみません。私……………です」

消えるような細かい声で手を挙げるフーネさん。この人、自分の容姿がわかっていてこんな事をしているのなら孔子様もビックリだな。

「マスター」

「はいはい、分かったよ。今すぐ作るから待ってな。アイギスは皿の用意な」

「了解しました。マスター」

少し早い夕食だが、それもたまにはいいだろ。そう思いながら俺は部屋を出る。さて何を作るつか。

.....

.....

.....

場所は変わって台所。俺の父も母もシンプルと料理が大好きだったので、色は白で統一されていて、形も少しヨーロッパ風になっている。それに俺の家は俗に言うダイニングキッチンなのだが、アイギス達は何故か嫌がり今となってはダイニングはテレビを見る部屋となっている。だから食事をする時は、一階の『HOME』まで降りなければならぬ。まったくもって面倒くさいのだが、アイツらがどうしても！と言っただからしぶしぶ承諾をしている。って俺は誰に説明してんだ？

「.....ま、いつか。それよりも今日は何を作るかな」と

全然考えてなかったの、冷蔵庫の中である物で作ろうと思っ

蔵庫を開く。

「……パスタだな、こりゃ」

あるのは市販のパスタ麺と数種類の貝と魚。これから導きだされるのは……海鮮パスタ。

「確か香り付けにオリーブがあったような……」

フーネさんもいる事だし、ちょっとおしゃれにしてみたい所なんだが……お、あった、あった。それじゃあ作りますか。俺は自分専用のエプロンを装着し、料理にとりかかり始めた。

またまた場所は変わって、ある一本道。外は暗くなり街灯の灯りがポツンと光る中、鈍い嫌な音と共に一人の若い男が街灯の下に倒れた。光に照らされているその男の顔は赤く膨れあがっていた。

「まったく、女性を襲うなんてどういふ教育を受けたのかしら。早く帰ってキョーヘイをもふもふしなきゃならないのにまったく」

そんな時、街灯の光が届かない暗闇の道の隅から女性の凜とした声が響く。そしてハイヒール独特の足音がその場から遠ざかっていった。

第四話 「主人公、どうする?」「いや、俺に聞かれても……」(後書き)

「お〜い、安眠や〜い」

「どした?」

「うおっ!?!突然現れるなよ」

「別にいいじゃん。それよりどした?」

「いや、更新がまた遅くなる可能性がある噂で聞いたからな」

「そうだな〜。俺も4月になったら岡山県に引っ越したからな〜」

「え!?!マジで!?!」

「マジマジ。だからまた遅くなるかもしれんな」

「そうか……まあ、のんびりしていくのが安眠のコンセプトだし。」

読者の方は納得しないかもしれないが、俺は別にいいぜ」

「ありがとうよ。なるべく努力はするからよ」

「くくく」

「それじゃあ」

「そうだな。それでは読者の皆さん」

「」

「また会う日まで」

第五話 「主人公、異変を感じる」「いや、感じない感じない」(前書き)

「やっと更新できた」

「お疲れ様だな安眠。引越しの準備は出来たのか？」

「ああ、もう少しで終わるな。それより今日は嬉しいニュースが入ってきているぞ」

「ん？何だ？」

「なんとPVが50000を突破しました!!」

「おお!!すっげえ!!」

「これも読者の皆様方のおかげです」

「欲をだせばもっと感想とかレビューが欲しいのだけど」

「京平、読んでくれるだけでもありがたいんだ。そんな事を言っちゃいけません」

「口調が母親だな……あ、それとこの小説をお気に入り登録してくれている灰色の野良猫様とR | meso様、こんな駄文をお気に入り登録してくれて本当にありがとうございます」

「ちなみに灰色の野良猫様、京平達がそちらの小説に出演したいと思うので、もしよかったらお願いします」

「ソラって子に会うのが楽しみだな」

「あ、ちなみに九龍も行きたいって言ってたぞ」

「………なんとしてでも引き止める。もしかしたら禁断の愛が始まるかもしれない」

「有り得ない事いうなバカが。よし、それじゃあ始めますか」

「魔法少女リリカルなのは ハーレム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ 始まります」

第五話 「主人公、異変を感じる」「いや、感じない感じない」

料理開始から二十分。俺の目の前には地中海式の海鮮パスタ。作った感想としては少し懲りすぎた……まあ別に大丈夫か。

「じゃあ持って行きますかね」

つと、こんなに一気に持っていけねえ。お盆はどこだ？

「マスター」

「ひゃわい！！って、アイギスか」

突然後ろからアイギスに声をかけられたせいで変な声をだしてしまった。って言うか何時からいた？

「って、お前何時からいた？」

おっと口に出してしまった。だがアイギスは俺の質問には答えずに真面目な顔で俺を見る。

「……どうやら、真面目なお話らしいな」

俺がそう言っているとアイギスはゆっくり頷く。最近はこんな事無かったのにな。まったく。

「……先ほど鳴海市にロストロギアと思われる物体が現れました」

ここで簡単に説明しておこう。ロストロギアとは過去に何らかの要因で消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で造られた遺産の総称。

多くは現存技術では到達出来ない超高度な技術で造られた物で、使い方次第では世界はおろか全次元を崩壊させかねない程危険な物もあるらしい。これ全部ラットル君から教えて貰った。

「数は？」

「分かりません。しかしロストロギアと共に何者かが侵入しました」

アイギス、オハン、イージスには鳴海市全体に、ある探索用の結界をはって貰っている。だから何かあればこんな風に知らせてくれるのだが、困った事になった。

「人数は分かるか？」

「一人…かと」

「一人か…」

一人なら何かあってもどうにかなるが相手が管理局なら……。

「どうされますか？」

「そんなの訊かなくても分かってるだろ？いつものように様子見だ。何かあっても大抵は九龍がどうにかしてくれるしな」

実はこんな事が起きるのは一度では無い。過去に二度程この街に時空犯罪者と思われる方々が来日したが、全て九龍が片付けてくれた。あいつは正義心が強いし、滅茶苦茶強いからな。

「しかしマスター程ではありませんよ」

「ナチュラルに心の声を聴かないでくれアイギス」

「分かりました」

「そういや、オハンとイージスはこの事を知ってるだろうが、ラットル君とフーネさんはどうだ？」

「あのバカ鼠は薄々感づいていますが、フーネさんは全然ですね」

そうか。ならラスカも帰ったらきつと訊いてくるな。

「よし。アイギス、この皿を一緒に一階まで持って行ってくれないか？」

「了解です。マスター」

そう返事してアイギスは器用に皿を四枚ほど手に持ち、開けていた扉を出て扉を降りていった。

「さてさて、どうなる事やら」

嫌な予感がプンプンするが、なるようになれだ。おっ！お盆みっけ。

.....

.....

.....

場所は変わって一階、HOME内。

「京平さんも、流石にお店の中まではシンプルにしなかつたんですね」

「シンプルにしたかっただんですが、ここは母と父が粘って無理だつたんですよ」

内装は薄いピンチ色の壁に周りには母が作った可愛らしい？ぬい

ぐるみを所狭しと並べられている父が作った木材の棚。後は他の店のケーキ屋と同じような感じ。

そこに俺達は部屋の中央の結構広い空間に長テーブルと椅子を持ってきて座っている。

「やっぱりこの空間は落ち着くっす……」

「こんなぬいぐるみ達に囲まれて落ち着けるお前は凄いや」

「そうっすか？ イージスやオハンも落ち着いてるっすよ」

そう言ってラトルが指差す席には、オハンとイージスが何時ものように漫画と小説を読んでいた。

「いつもと変わらないじゃないか」

「甘いつすよ兄貴！ オハンは漫画、イージスは小説を読むスピードがいつもより少し遅いっす！」

「少しっす？」

「2・2秒ほどっす」

「気づけるか!!それよりラトル。お前は確かゴミ袋に包んで棄てた筈なのだが……」

「そんなの俺っちにかかれば楽勝っす!!」

今度は燃やしてみるか……。ちなみに席順は俺の右隣にフーネさん、左にラトル君、向かいにアイギス、イージスとオハンはアイギスの右と左にそれぞれ座っている。

「うふふ…やっぱり楽しいですね」

「マスター!鼠!そんな話より早く食べましょう!!」

右に座っているフーネさんが俺とラトル君の会話を聞いて楽しそうに笑い、アイギスは涎を垂らしながら目の前の料理を目を輝かせながら見ている。

「ダメだぜいアイギス。まだラスカが帰ってきてねえぜえ」

我慢できないアイギスをオハンが漫画を読みながら宥める。

「ラスカとは誰ですか？」

不思議そうな顔をしながら俺に訊いてくるフーネさん。そう言えばまだ言っ<sup>て</sup>無<sup>か</sup>つたな。

「ラスカは家の居候です。頭がいいんで今は大学の教授をしてるんです」

「そうなんですか」

そんな話をしていると、扉の前に人の気配。

「……帰ってきたらしいですね」

「えっ？」

フーネさんの気の抜けた声が合図となった。

バンツ！と大きな音と共に扉が開き、そこから物凄いスピードで何者かが家に入ってきた。いや、誰かは知ってるんだがな。

「キョーヘイiiiiiiii!!」

何だ？大声で叫ぶのは流行ってるのか？

「お帰りラスぶほっ！！」

何者かは入るや否やすぐに俺の首に手を回して抱きついてきた。余りの勢いに倒れそうになる。

「え〜と……その方が」

「そうっす。ラスカっす」

フーネさんの質問に普通に答えるラツトル君。艶やかな黒い髪にルビーのような紅い目を持ち現在進行形で俺に頬ずりをしている眼鏡の女性、それがラスカ。ラスカを一言で現すと‘美人女教師’や‘大人の女性’、‘妖艶’が一番しっくりくる。身長は173cmと女性にしては高く大学の生徒にも好かれていて、あだ名は女王様

「それにしても……」

フーネさんはラスカの胸を見て言葉を詰まらせる。はい、確かに胸は大きいです。F？だったような……。。

「カラス！！早くマスターから離れなさい！！」

突然、アイギスがラスカに向かって叫ぶ。その表情からは（怒）の感情がはつきり現れていた。

「あらアイギス。どうしたの、そんなに顔を真っ赤にして？肌の手入れちゃんとしてる？」

「黙りなさいカラス！！マスターが嫌がってるじゃないですか！！」

「そう？私には嬉しがつているようにしか見えないけど？」

「いや、迷惑だ」

このままじゃ喧嘩が起きそうだったので、バサリと話を切つてやる。

「そ、そんな〜……」

俺の返答にラスカは情けない声をだしながら膝から崩れ落ちる。どこの悲劇の女王様だお前は。



「新しい家族？」

「予定な」

「女性？」

「見りゃわかるだろ」

そこまで俺に訊くと、品定めをするようにフーネさんをジロジロと見始める。するとある一点で目が止まる。

「……………」

「？何か？」

「……………貴女着痩せするタイプ？」

「……………ななな、何を言ってるんですか……！」

顔をタコのように真っ赤にしながら胸を隠すフーネさん。ラスカ

はそれを見て小悪魔のような笑みを浮かべる。

「言っておくけど、キョーヘイは渡さないわよ」

何を唐突に言っただお前は。

「の、望むところです!!」

「フーネさん、貴女も何を言ってるんですか？」

「二人とも、兄貴は俺っちの物です!!誰にも渡せねえっす!!」

「イージス、オハン。この鼠あとで燃やしといて」

イージスとオハンは笑顔で頷いてくれた。良かった、良かった。

「マ〜ス〜タ〜」

アイギスがいつか見せたようなゾンビのような声で俺を呼ぶ。こいつも話に参加してくるのかと思ってそっちに顔を向けると、腹を押さえながら机に倒れているアイギスの姿があった。

「うっは〜ん」

「お前、そんなに腹減ってたのか……」

「うっ」

我慢の限界がきているようなので、俺は最後に全員を見渡す。

「それじゃフーネさんは俺達の家族になるって事でいいか？」

その質問にみんな笑顔で頷いてくれた。

「よし、じゃあ」

「……………いただきます」「……………」

そうしてフーネさんがはれて俺達の家族の一員となった。

第五話 「主人公、異変を感じる」「いや、感じない感じない」(後書き)

「フーネさんよかったね」

「ありがとうございますぞいます安眠枕さん、これも京平さんのおかげです」

「俺は何もしてないさ」

「またまた格好つけちゃって」

「うるさいぞ、安眠」

「くっくっ………それにしても京平はいつの間にあんなにフラグを建ててんだよ。作者の俺もびっくりだ」

「はあ？何言ってるんだ安眠」

「へっ?」

「そうですねよ安眠枕さん。アイギスさんとラスカさんはどうか知りませんが、私は京平さんが好きですが愛している訳ではありませんよ」

「……よく分かったのだが？」

「つまりはI i k eではあるけどI o v eでは無いのです」

「なかなか難しいな」

「きっとアイギスとラスカも同じだと思うぞ。というより、そうしてくれないと将来自立が出来なくなるからな」

「うーむ……哲学だな」

「これは哲学でも何でも無いと思うんですけど……」

「まあ頭の悪い安眠はおいといった、そろそろ終わりにしますか」

「そうですね。それじゃあ読者の皆様」

「また会いましょう」

「うん、うん……全然わからんな、やっぱり」

第六話 「主人公、考える!」「別にサブタイトルにしなくてもよくな?」「(前  
「感想、もしくはレビュー下さい」

「土下座なんかして突然どうしたんですか?はっ!もしかしてマスターは私に踏まれたと!」

「ありえねえよ、毎年頭がお花畑野郎が」

「でも!でも!私はDMであって決してSでは……ああ!しかしマスターがそうして欲しいなら……」

「諦める京平。アイギスはもうダメだ……」

「畜生!!誰がアイギスをこんなダメな性格にしゃがったんだ!!」

「あ、俺俺」

「あんみいいいんん!」

「ああ!でも!……あ、そう言えば魔法少女リリカルなのは

ハーレム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ  
始まります」

「「軽いなオイ！！」」

第六話 「主人公、考える！」 「別にサブタイトルにしなくてもよくな？」

夕食も終わり現在は皿を洗い中……。それにしても食事中は静かだった。あんなに騒がしかったラットル君やらアイギスやらが黙々とパスタを頬張っていた光景は異様だった。

「……俺の料理ってあいつらからしたら鎮痛剤と同義なのかな？…  
…」

料理Ⅱ鎮痛剤……うわぁ…スッゴい嫌だ……。

「そんな事はありませんよ」

「ふへっほお！！……ってフーネか……」

またもや急に後ろから声をかけられたせいで、変な声を出してしまった。……不覚。あ、ちなみにさん付けじゃないのは、夕食が終わった後にフーネに「もう家族なんですからさん付けは止めて下さい」と抗議されたからである。

「ふふふ。やっぱり京平さんは面白いですね」

「笑うな。それよりフーネ」

「はい、何でしょう?」

「家族になつたんだからさん付けは止めないか?」

人に言つといて自分はやらないのはダメでしょ。やっぱり。

「あ、はい……じゃあ京平?」

「何故に疑問形?もう一回」

「京平?」

「……やっぱりさん付けで、お願いします」

どんな風に育てられたんだフーネ?人をさん付けで呼ばないと疑問形になるってそうそう無いぞ。

「あら、フーネちゃん」

ひよこりと扉から顔を覗かせるラスカ。風呂からあがったのか少し顔が火照っている。

「お風呂空いたからフーネちゃんも入りなさいよ」

眩しい笑顔でフーネにそう告げる。だがその笑顔の裏に何かある事を俺はもちろん知っている。ラスカがよく使うやり方だ。

「だってよフーネ。さっさと風呂入りな」

「え、でも……」

「皿の事か？もうすぐ洗い終わるから大丈夫だぞ？」

「いえ、それでは無く……」

「ん？ならなんだ？」

「……覗き「するかバカが」

俺の家族にはこんな変な奴しかいないのか!?

「はい、いませんね」

「だからナチュラルに心の声を聞くな、アイギス。そしていつから俺の後ろにいた」

「マスターの後ろは私の居場所です」

「理解不能だよ馬鹿やろう。さっさとフーネ連れて風呂行ってこい」

アイギスは気の抜けた返事をして、フーネの腕を掴み引きずりながら出て行った。それを確認したラスカがゆっくりとした足取りで入ってきた。

「お前は本当にその黒いパジャマ好きだよな」

ラスカが着ていたのは無地の真っ黒いパジャマ。

「当たり前よ。これはキョーハイが私に似合っつて買ってくれた物じゃない」

「……そうだったけ？」

記憶に無いです。はい。

「ひ、酷い……」

おろおろとワザとらしく泣き崩れるラスカ。さてさて……。

「……そんな嘘臭い芝居はいいぞラスカ。本題に入るぞ」

皿を洗う手を止め、ラスカに向き合う。するとラスカもすうと立ち上がる。

「はあ……で、どうするの？」

「ロストログアと侵入した奴の事か？」

「当たり前よ！このまま放っておいたら……」

「どうせ九龍がすぐに解決してくれるさ」

「でも！」

「ふう……… いったいどうしたんだラスカ？ いつもならすぐに納得してくれるだろ？」

俺がそう訊くとラスカは苦々しそうに顔を歪める。こんな顔は初めて見る。本当にいったいどうしたんだ？

「……… いたのよ………」

「いた？」

「九龍の他に魔力を持つ者がいたのよ！！」

「……… つまり」

魔法局員かも知れないって事が………。

「まったく。ここは管理外世界じゃないのかよ………」

「……どっどっするの?」

……どっどっするもどっどっするも無いだろ。

「ラスカ、紫月のメンテナンスは終わってるだろ?」

「……殺すの?」

「そんな事するはず無いだろ。人殺しなんか俺には一生関係ない事だ」

「なら、どっどっするの?」

「……まあ気絶させてアイギス達に頼んで記憶操作をしてもらおう」

記憶操作が出来るかどうかは知らんが……まあこっだけ魔力あるんだから、それぐらいはできそうだな。

「で、その魔法を持つてる奴の特徴は?」

「え〜と……女の子で」

ふむふむ。

「髪の色は茶髪で髪型はツインテール」

ふむふ…む？

「それで最後に」

ラスカはびしい！！っと効果音が聞こえてきそつなぐらい見事に俺を指差す。

「キョーハイと同じ学校！！」

「あいつじゃねえかああああ！！」

あの取り巻き三人組の内の一人が管理局員？いやいやいや、有り得ない！！

「ラスカ、それは流石にありえねえよ……」

「何言ってるのキョーヘイ!! 私は真面目よ!」

「だってさ……九龍の取り巻きの一人だけ、そいつ」

「……え? そうなの? でも確かに魔力はあったわ。それも結構な量の……」

「ふうん……で、その子とはどこで会ったんだ?」

「私の同僚が、美味しい喫茶店があるから一緒に行かない? って言うから行ってみたんだけど、そこで」

「その子が働いている姿を見て魔力を確認した、と」

「そうそう」

「成る程な……」

一応気にはしておくか……でも考えてみたらあいつは絶対に九龍の味方するだろうし……だったら俺の苦勞が減るのか!?

「……それも一応保留だな」

「えっ!？」

「大丈夫、大丈夫。あいつの事だから、保留どころか無視をしておいてもいいぐらいだ」

「ほ、本当?」

「ああ」

「キョーヘイがそう言うなら……」

まだまだ不満そうな顔をしていたが、俺の説得により渋々頷いた。

「じゃあラスカ。一応紫月返して」

「あ、それはちょっと待って。最終確認がまだだから明日の朝には終わらせるから」

「了解」

「じゃあキョーヘイ、おやすみなさい……」

そう告げて眠そうに欠伸をしながらラスカは出て行ったのを確認して俺はポツリと呟いた。

「……安心しろ」

お前は

俺が絶対に守ってやるから……」

……ちょっとクサイな、俺。

第六話 「主人公、考える！」 「別にサブタイトルにしなくてもよくな？」 (後

「やっと……やっと……」

「そつだな……やっと」

「「物語が進行したあああああ！」」

「まったく安眠も伸ばしすぎだぜい」

「いくらネタが無いかと言っても遅すぎではないか？」

「あ、イージスとオハン」

「この小説の中でも唯一の常識人達だな」

「…常識人か？十分こいつらもおかしいような……」

「どごがおかしいのだ？」

「俺達はただマンガと官能小説を読んでもただだあぜい」

「いや、それがダメなんだよ……」

「お、安眠。これ貸してくれたマンガ返すぜい」

「へいへい」

「それと官能」いや、まず俺持ってねえから「なんだと!!官能は芸術だぞ!!」

「どこのCODEさんだよ……」

趣味があつてお話中……。

「それじゃあ今日はこのぐらいにしますかな」

「賛成だぜい」

「安眠からお願いだけど、出来たら感想でもレビューでもいいから書いて欲しいな」

「欲を出してはいけないぞ。しかし官能欲ならバンバンと」ださねえよ！」「ちっ！！」

「それでは皆さん」

「」「」「」また会いましょう(会おうぜ)」「」「」

第七話 「主人公、明かす」「何をだ！」（前書き）

作者が五月病のため、今日の前書き、後書きはお休みとさせていただきます。

申し訳ありません。

第七話 「主人公、明かす」「何をだ！」

皿洗いが終わり、風呂もすませた俺はみんなを台所に呼んだ。勿論席順は夕食の時と同じだ。

「さて、全員揃ったな」

俺がそう確認するとフーネ以外はみんなは頷く。

「あの〜、これから一体何が行われるのですか？」

恐る恐る手を挙げて質問するフーネ。どうやら誰もフーネに教えて無いらしいな。

「ん〜…フーネ。アイギスと話した内容覚えてるか？」

「内容ですか？」

フーネは俺の質問に目を瞑り今日一日の事を思いだしているような仕草をみせたが、すぐに思い出したようで小さく「あ、」と呟いた。

「思い出したか？」

「はい。確か管理局に会ったら危ないとか何とか」

「おいおい。ついさっきの事なのにそこまでしか思いだせないのかよ。」

「無理して真剣に話したのに……」

「そんなに落ち込むなアイギス。たしかにいつもボケってばかりのお前があれだけ真剣に話したのは、初めてお前と会った時以来だったよ。」

「で、なんで管理局に会ったら危ないんですか？」

「おおっ！アイギスをスルーするとは、急にレベルが上がったなフーネよ。」

「それはな、俺達が時空管理局に、追われてる、からな」

「俺が平然とフーネに答えてやると、フーネは固まった。そりゃあ当たり前か。」

「もしかして……皆さん時空犯罪者？」

ん……。

「まあ率直に言つとそうなるのか？」

「そつっすね」

「まあ私達、何も悪い事してないけどね……」

拗ねたようなラスカの言葉を訊いて、フィーネの頭の上には疑問符が沢山浮かび上がっていた。ここから、今の状態でそんな事言われたら、混乱するだろ。

「????」

「ほらほら、混乱するな、混乱するな。ちゃんと教えてやるから。じゃあトップバッターでフィーネに自分の過去を教えたい奴？」

すると元気よくラットル君が手を上げた。仕方ないな。

「はい、じゃあアイギス」

「兄貴！俺っち手あげてるっすよ!？」

「ああ、ちゃんと手あげてるな。じゃあアイギス」

「なんでそうなるっすか!？」

「誰も手を最初にあげた奴がトップバッターとは言っていないが？」

「それはただの屁理屈っす!！」

「ああ〜！もう分かったよ。じゃあ、はいドブ鼠」

「ドブ鼠!？」

ラットル君は少し疲れたような顔をしていたが、気を取り直したのかコホンと咳払いをした。

「じゃあ改めて……初めましてっす！俺っちの名前はラットルっす！気軽にラットルって呼んで欲しいっす」

「ラットルさん……こう言ったら失礼ですが、変わった名前ですね？」

まあ、一番突っ込まれそうな所を突っ込んできたな。流石フィーネ。それに対してラットル君は少し気まずそうな表情で頬をポリポリとかく。

「ラットル君……」

「……確かにフィーネっちの言う通りこの名前は兄貴がつけてくれたっす！本名は……」

そこで言葉を詰まらせる。毎度毎度、しょうがないな。

「毎度毎度だな。ラットル君は」

「そ、そんな事は……」

……ったく。

「言いたく無かったら、言わなくてもいいぞ。だがそれじゃあ一歩も前には進まないがな」

俺の一言を訊いて少しの間苦悶していたラットル君だったが、諦めたのか溜め息をはきながら肩を落とす。

「はあ〜……俺っちの本名はアールレイ・スクラティアっす」

「アールレイ・スクライア？どこかで聞いた名前ですね？」

フーネの言葉にラットル君は悲しそうな表情を浮かべる。

「アールレイ……アールレイ………あっ！！」

アールレイの名前を思いだしたのかフーネが突然声をだす。だが思いだした情報が信じられないのか、それを見かねてかどうかは分からないが、ラットル君が唐突に口を開く。

「そう…俺っちはあの『アストラル盗難事件』の犯人っす…」

『アストラル盗難事件』。

この事件はあるロストロギア発見から起きた。その名前はアストラル。アストラルは管理局が把握しているロストロギアの中でも特に謎の部分が多く、化学者の中にはアルハザードに行く手掛かりとなる、っと豪語した者までいた。

だが、発見されて僅か三日目の朝に、何者かが管理局の厳しい警



「「「「「か、感動？」「「「「「」

あまりにずば抜けた返答に、この場にいる全員の声が重なった。

「そうです！実は私幼い頃からずっと無限書庫に籠もってまして…

…」

「……もしかして監禁？」

ラスカがそう訊くと、フィーネはえへへと笑いながら頭をかく。

「……まあ言い方を変えればそんな感じですね…」

そうして場の空気がしんみりとなる。あれ？いつの間にかフィーネの話になってる？あの伏線はここで回収しちゃうつもり？

「両親は無限書庫に勤めていた魔術師だったらしいです」

「だった、と言う事はフィーネ殿の両親は」

「はい。私が五歳になる時に死んだと聞かされてます……」

「それは誰かから聞いたんだい？」

「管理局の人からです……たった一言告げられて……それっきりです……」

ん……なんか裏がありそうだな、それは。

「それから言うもの私は管理局の人から与えられた小さな部屋と寝室で、ずっと本を読まされてきました……」

すると段々とフーネの体が震え始めた。微かだが、目の焦点もぶれ始めている。これはヤバいかも？

「朝起きてご飯を食べてすぐに本を読まされて、その種類は絵本から難しそうな本までずっとずっと読まされてお昼が来てご飯を食べるとまた「もういいです……!!」「ッ！」

アイギスがそう叫ぶとフーネはゆっくりとアイギスを見る。その目を見た俺と他の奴らは言葉を失った。

よく小説や漫画で、今にも死にそうなキャラやヤンデレの少女達

を文章で表現するときに、虚ろな目、や、目に光が無い、とか言うが、今のフーネはまさに、それ、だった。

「フーネ……もう大丈夫ですよ……」

そんな目をみたせいなのかは知らないが、気がつくとアイギスが  
の声と信じられないぐらいの優しい声で、フーネに語りかけると、  
ゆっくりとフーネに抱きつく。

「誰もあなたに無理やり本を読ませないから大丈夫ですよ……」

「……本当？」

「本当ですよ……あなたは今日から好きな時に好きな本を読みなさい  
……だから安心して……」

「……よ……かつ……た」

フーネはそう呟くと前のめりに倒れた。それをアイギスが優しく  
支える。

「……マスター」

「…俺の部屋で休ませておいてくれ、俺は一階で寝る」

「了解しました…」

アイギスは頷いて、二階にフーネを運びに行った。行ったのを確認するとラスカが荒々しく立ち上がる。

「……キヨーヘイ。そろそろ管理局を潰しましょうよ……」

手を力強く握りしめ、声を震わせながら俺に進言するラスカ。だがそんな事を俺が承知するわけにはいかない。

「ダメだ」

「なんで！？キヨーヘイも知ってるでしょ！！ラットルも私もあいっすらに……」

「そんな事は重々承知だ。だが、管理局全員が悪い奴じゃない」「っ！そんなのー！！」

「ラスカ…お前は管理局の黒い部分を見過ぎたんだ。あいつらにもちゃんと良い所はある」

「じゃあ管理局の良い所ってなんなのよ！！！！キヨーヘイの友達だって管理局のくせして何時も女の子達とヘラヘラして！！！！この町を守っていないじゃない！！」

「…ちゃんと守ってるぞ」

「守ってない！！！！守ってたらキヨーヘイが戦わなくてもいいじゃない！！」

乱暴にそう叫びラスカは荒々しく机を立ち、二階へと上がっていった。ラットル君もラスカが行った後にゆっくりと立ち上がり、俺に視線を向ける。

「…残念っすけど兄貴。こればかりは俺っちはラスカに賛同するっす……」

そう言い残して、ラットルも二階へと登って行った。この場に残っているのは俺とオハン、イージスのみ。

「……はあ、胃が痛いよ、まったく」

「その若さで胃に穴が開いたら、マスターそうとうヤバいぜい」

「それにしても、あ奴らは勝手な事を言い過ぎる！マスターがどんな気持ちかを知ろうともせぬ！！」

「まあいいさ。いつか分かってくれるだろ……」

最後にそう言って、時計をしてみる。11時か……。

「んじゃ、俺は明日の仕込みしとくから、お前らはもう寝ろよ」

二人は了解というたとさつさと二階に上がっていった。

「さてと……始めるか！」

自分にそう気合いを入れてから、俺は厨房へと向かった。

第七話 「主人公、明かす」「何をだ！」（後書き）

最近体が怠くって、何もやる気が起きないのは、やっぱり五月病なのかな……。

はあ〜。

第八話 「主人公、ついてない」「ああ、特に今日はな……」（前書き）

「た……だいま……」

「おうお帰っ！？どうしたんだ京平！！たしか【灰色の野良猫】様の小説に遊びにいったんじゃあ！？」

「ああ……九龍と……一緒にな……たが……帰り道………三天使様達に見つかっちまって……」

「まさか……」

「九龍を独り占めにして……許さない！！………そう叫んで……襲いぐう！！……」

「それ以上喋るな！！傷に響く！！すぐにアイギス達を呼んでやるから……」

「へへ……それからずっと………恐怖の……デッドレースさ……」

「くそっ！こんな時に限ってアイギス達と連絡がつかねえ！！……」

「あ……………それと……………これ……………【三盾のレリーフ】……………と【三大天使のレリーフ】……………飾っというて……………く……………れ……………」

「京平！？京平いいいいいい！！！」

「……………あ……………言うの忘れて……………た……………魔法少女リリカルなのは……………ハ……………レム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ……………は……………じ……………まり……………ます……………」

「京平いいいいいい！！！」

第八話 「主人公、ついてない」「ああ、特に今日はな……」

道場。そこは自分を肉体的にも精神的にもいじめ抜き、人間をさらなる成長へと導く神聖な場所。そして俺には一生関係の無い場所  
な筈だったんだが……。

「どうしてこうなったんだろ……」

俺は力無く呟く。その原因は俺が今いる高町家の道場と、目の前にいる

「さあ遠慮はいらないよ。いつでもきなさい！」

この娘LOVEのバトルマニア、高町士郎氏。正直、マジで勘弁して欲しいです。まだ死にたくありません。

「あの〜、お尋ねしたいんですが〜？」

「ん？どうしたんだい？」

「自分はどうして貴方と勝負をしなければ……」

「それは、あの二人のせいだよ」

そう言つて、指を向ける先には、睨みあうバカ二人　もとい炎九龍と高町　恭也氏の姿があつた。恭也氏は普通の木刀の半分ぐらいの長さしかない木刀を両手に一本ずつ持ち、体制を低くしている。まるで獲物を狙うヒョウ。片や九龍は木刀を両手で握りしめ、下段？の構えをとっている。

二人とも真剣な眼差しで相手の出方をうかがっている。

「頑張つて〜九龍君〜」

「負けたら承知しないわよ〜!!」

「お兄ちゃんなんか倒しちやえなの〜!!」

「兄さん、相手は子供なんですから手加減してくださいよ〜!!」

九龍にそんな甘い声援を送るのは、道場の隅にいる三人娘となのはの姉である高町美由希氏。……どうやら美由希氏も九龍ハーレム軍団の一員になってしまったらしい……。だつて九龍を見る目が危ないもん。

「それにしても九龍君は罪な子供だね〜」

「そうですね。だから僕と戦うのは止めて九龍と「二対一」は卑怯と思わないかい？」……」

逃げ道無し！！

……いや、落ち着け。まずどうしてこんな事になってしまったのかを、今日の朝から思いだしてみよう

朝六時。小学生にとってはまだまだ寝ていなきゃいけない時間の筈なのに

『でねでね。京ちゃん聞いてよー！』

「こんな朝っぱらから母さんの声は聴きたくないです。さようなら」

『わー！ちょっと待ってよ！せっかく母さんが電話してきてあげたのよー……』

「頼んでないです。はい」

『ひ、酷い!?!』

電話越しに叫びまくるこの女性は一応俺の母親の菅原 菜摘<sup>ナシミ</sup>。樂觀的でいつもハイテンション。でも真剣な話しをする時とかは、ちやんとする。スイッチの切り替えが上手いと確か自分で言ってたな。

『そう言えばそっちはどう?魔法とかバれてない?』

魔法の事は母さんと父さんが九龍の両親と友達で、それも九龍の両親が管理局員だったため結構詳しくなったそうだ。

「そこらへんは大丈夫。でも、とある事情により家族が一人増えた」

『あら、そんなの?.....もしかしてまた管理局がらみ?』

ビキッ!つと何かがひび割れる音が、受話器から聞こえる。どうやら軽々しく怒っているらしい。管理局がらみになると、最近ではいつもこう。昔は管理局には全然興味が無かったらしいのだが、ラツトルとラスカの事を、以前電話越しに伝えた時からずっと管理局を

目の敵にしている。

「まあ、そうだな」

それからフーネの事を簡単に説明すると母さんは黙りこむ。そして受話器の向こうから凄い量の殺気がビシビシと感じる。うわぁ、キレてるキレてる。

『……ちよっとお父さんと管理局潰してくるわ』

「洒落になんねえよ！」

実は母さんと父さんは滅茶苦茶強いです。ハンパなく強いです。この二人が本当に潰そうとするなら管理局なんか一週間あれば跡形もなく消えるでしょう。

「確かに管理局は今腐ってるが、遠くない未来、九龍がどうにかしてくれるって」

『その保証はあるの？』

「九龍一人だったら無理だと思うけど、あいつにはちゃんとした友

「達がいるから大丈夫でしょ」

『万が一、それでも無理だったら？』

「そんな時は……俺が出るしか無いじゃん……」

「だけど、そんな可能性万が一にも無い。なぜなら俺が出るとい  
事は……管理局だけじゃ被害が収まらなくなるからだ。」

『京ちゃん……それ本気？』

「母さんも俺の力を知っているんで、不安そうに訊いてくる。」

「半分本当、半分嘘」

『嘘かい！！』

「いや嘘ではない。でも本当でもない。簡単にいえばケースバイケ  
ース。その場の状況でどうにかするつもり。」

『……まあ、ちゃんと考えてみたら、確かに九龍君がいるから大丈  
夫かな』

受話器の向こう側からクスクスと、笑い声が聞こえる。機嫌は治ったらしい。良かった、良かった。

『でもね、京ちゃん』

「ん？」

『九龍君に頼りすぎると、後で何かあった時に対応出来なくなるわよ』

「例えば？」

『九龍君が敵になるとか』

「あ、それなら遅かれ早かれ敵対するとは思っよ」

『……は？』

「いやあ、だって、管理局が必死になって追い掛ける極悪人？を三人も匿ってるから、俺も十分に犯罪者だし、それにラットル達

を一生隠し通せる事は不可能。いつかは見つかる」

『じゃあ、どうするの?』

「うーん……きっと見つければ、一番近い九龍が一人で捕獲にくると思うから、俺が説得してみる」

『もし、説得が失敗すれば?』

「九龍と少し、遊んであげる」

そこまで、説明すると母さんが黙る。つられて俺も黙る。

『……まったく、未恐ろしいわね。京ちゃんは』

「誉め言葉として貰っておきます」

その後はたわいのない会話を朝の7時まで聞かされた。最後は流石にこっちがキレて、強制的にきってやったが。

「まったくあのバカ母は……」

朝から無駄な労力を使わされ、それに睡眠時間まで削られ……俺  
って本当に小学三年か？

「ふあ〜っっておおマスター!？」

「ん？あ、イージスか」

階段の方から声がしたので、振り向いてみるとイージスが目を丸  
くしていた。

「マスターがこんなに早く起きるのは珍しいの」

「……バカ母から電話があっつな」

俺がそう言つとイージスは、同情の眼差しで俺を見てきた。

「イージス……悲しくなるから、そんな目で見ないでくれ……」

「……うむ。了解した……」

イージスは俺に優しくそう言うと、台所の方へ歩いていった。ちなみに朝食はアイギス達が当番を決めて作って貰っている。俺は別にそんな事しなくてもいいと言ったのだが、小学生が見栄をはらない！と怒られてしまっただ。

「はあ〜……なんか今日はとことん不幸な気がする……ってそんな訳無いよな〜」

そんな予感がまさか的中するとは、この時はまったくもって予想していなかった

さて、その後どうなったかを説明しよう。まず朝っぱらから昨日の夜の事についてラットルとラスカにまだくどくどと責められ続け、ますますあの二人と気まずくなる。

やっと朝食が終わり解放されると、今度は九龍と三天使様が家の前に立っていました。その光景を見てしまった瞬間、俺の残り少ないHPが一気に0に。久々に九龍を埋めてやるうと思っっちゃった

そして、三天使様から呪詛を真っ正面から受けながら学校に到着。

学校につけば、少しは楽になるだろうと思ったのだが、一時間目からまさかのグループ学習。これは先生の質問に対して五人で相談し考えるという一般的に見ればとても素晴らしい授業であるが、俺には地獄でしかない。だって組むのはいつも九龍と三天使様になっ  
てしまうからだ……。ええ、またもや三天使様から呪詛をかけられましたとも……。

地獄の一時間目が終わると、二時間目は先生の都合により自習。大人しく寝ようとしたのだが、九龍がわざわざ席を立ち、俺に話しかけてきやがった。無視して寝ようとしたら、まさかのドロップキック。反撃に出ようとしたが、後ろにいた三天使様により沈黙。まるまる一時間、九龍の話の聞かされた。

結局その日の学校は何かと九龍と絡む機会があり、ずっと帰らしてと願っていた。

その願いがついに叶ったのか、六時間目が先生の都合により取り止めになり、待ちに待った放課後。

死んでいた頭と心臓をフル稼働させ、急いで荷物を鞆にしまいこみ、椅子から立ち上がり家に帰ろうとした。

だが後一步という所で、首に強い圧迫感を感じその場に倒れる。一瞬何が起きたのか理解が出来なかったが、俺の視界に一人の少女が映る。

「どこに行こうとしているのかしら」

笑顔でそう語りかけてきたのは、【金髪の女王】アリサ・バニン  
グス。

「……家に帰らせてただきたいので、この大型犬用の首輪を外して  
欲しいのですが……」

「ダメよ」

「……一応、理由を聞かせて下さい」

「だって貴方がいないと、九龍が私達と一緒に遊んでくれないもの  
」

恋とは素晴らしい物であるが、一歩間違えるとこんなにも恐ろし  
い物に変わるのだと、理解した小学三年生の夏。

抵抗も出来ないまま連れていかれた場所は、高町なのはの家族が  
経営している喫茶店「翠屋」。この海鳴市で一、二を争う有名店だ。

だがおかしな所が一つだけある……九龍は気づいていないらしい  
が、中から微弱ながら殺気が出ている。正直入りたく無いです。

「ねえやっぱり帰」できる物ならどうぞ 「……」

神は死んだ！

「じゃあ入りましょう」

アリサはそう言うと、翠屋の扉を開いた。

「…………あれ？」

流石は有名店、店内に漂うオーラが普通の店とは違う。でも不思議な事に、外で感じていた殺気が店内に入るとパタリと消えた。

「おかえり、なのは。そちらは友達かい？」

優しい男性の声が店に響く。俺は声のしたカウンターの方に目をやると…………そこにはこっちを笑顔で見ているナイスガイがいました。

「ただいま」

「えと…………誰？」

九龍が困ったようになのはに質問する。

「あ、紹介するね、お父さん」

「……なあ京平、俺の聞き間違いか？さっきなのはあの人の事をお父さんと言ったんだが……」

「ん？高町がそう言うんなら、あの人が高町のお父さんだろ？」

「いや、若すぎたる！」

「確かに、めちやくちや若そうだな」

高校生って言われても、全然違和感ないぐらいに若く見えるし。

「えと、こっちが炎 九龍君でもう一人の方が京平君」

俺はフルネームじゃないのね……もしかして名字を知らないのか  
もしれない……。

「そうかい、君が九龍君か。いつもなのはから聞いてるよ」

「あわわわわ！おお、お父さん！……」

顔を真っ赤にして急に慌てだす高町。この姿を写真に収めて、学校で売れば相当な額になりそうだ。

「ふん!!」

「ぐえっ!!」

心を見透かされたのか、アリサに思いっきり綱を引っ張られた。俺、人間ですよ!?

「それで君が……」

高町父が俺の顔を一瞥すると、なぜか笑顔のまま固まった。どして?

「あの〜どうかしました?」

「あ、いや何でもないよ……」

意味有り気な言葉を言うと、高町父は一步後ずさる。どうしてそ

んなに警戒されてるんだ？意味が分からない？

「でね九龍君、この人が私のお父さんの」

「高町士郎だ。よろしく」

士郎氏は笑顔で右手を九龍に向けて前に差し出す。

「あ、はい、よろしくお願いします」

九龍は突然の事で驚きながらも、しっかりと差し出された手を握り返した。いやゝ絵になりますな。

「それと、京平君も」

九龍と握手を交わすと、今度は俺に向かって手を差し出す。

「……………」

「……………?どうしたんだい？」



くだらうと思われる扉から高町と同じ髪の色をした一人の美しい女性  
性が現れた。高町の姉妹か？

「あら、なのは帰ってきてたの。おかえりなさい」

「お母さんただいま」

お母さん！？いや、若すぎ若すぎ！！

「おい京平」

「もう何にも驚かねえよ」

高町の両親、年齢偽ってるだろ。

「桃子さんどうしたんだい？もしかして新作ケーキが出来たのかい  
」？

「じつぶふ そうなのよ。それで食べて貰おうと思ってただけけど今  
日は可愛いお客様がいるのね」

屈託のない女神のような笑顔で俺達に視線を移すなのは母親の桃子さん。俺の母親に見せてやりたいね。

「そつだ 貴方達に新作ケーキを食べて貰おうかしら」

……くっ！パティシエの血が‘食べた’と叫んでいる！

「お母さんいいの？」

「いいのよ その代わりに感想を聞かせてね」

そう言い残して、桃子さんはケーキを取りに戻っていった。

「楽しみだね」

「どんなケーキなんでしょう」

「あゝ、早く食べたい」

三天使様達は皆、嬉しそうにしている。まあ有名店の新作ケーキを食べさせてくれるのは誰でも嬉しいだろうに。実際俺もワクワク

しています。

「俺、甘い物はそんなに好きじゃ無いんだが……」

「じゃあ食うな偽小学三年生」

「九龍の悪口を言つな!!」

「ぐえっ!!」

……いい加減泣いていいか？

「ただいま」

俺が精神的に折れそうになると、土郎氏に似ている美青年が店に入ってきた。また高町の身内か？

「おかえりなさい、お兄ちゃん」

「ただいま、なのは」

高町に兄と呼ばれた青年は笑顔で高町にそう言う。

「あれ？君達はなのはの友達……なのかな？」

あれ？高町のお兄さん？どうして俺と九龍をそんな殺気だった目で睨むのかな？

「先に言っておきますが高町のお兄さん！僕は高町と何の関係もありません！その証拠にコレを見て下さい！」

そう豪語しながら、俺の首につけられている首輪を見せる。

「……成る程。そうらしいね……」

スッゴい可哀想な目で見られたが、別に構うもんか！ここで潔白を示したら俺は安全だあああ！！

「それじゃあ……」

俺の説明を聞いて、殺気だった目を九龍へと向ける。

「すまないが、君の名前は？」

「……炎 九龍です」

九龍も高町兄の殺気に気づいたのか、ぶっきらぼうに答える。でも、そんな答え方をしたせいで高町兄の怒りを買ったらしい。

「へえ九龍君か……僕の名前は高町 恭也。急で悪いが少し……手合わせをしないかい？」

最後の言葉を発した直後、抑えきれなくなったのか殺気が恭也氏の体から溢れる。その殺気に当てられた九龍は小さく笑う。こっちもスイッチが入ったようだ。

「いいでしょう、受けてたちます」

「それじゃあ来てくれ」

恭也氏はそう言い残して出て行く。九龍は恭也氏の言葉に従ってその後についていった。三天使様も心配そうに九龍を追いかけた。そして残ったのは俺と士郎氏。

「……ねえ京介君」

「おいしいですね土郎さん。僕の名前は京平です」

「それは失礼した。じゃあ改めて……京平君は一体何者なんだい？」

「何者と聞かれても……さっきのモテ男君の友達ですが？それじゃあ僕は用も無いんで、帰らせて貰います」

「新作ケーキを食べていかないのかい？」

「九龍達があんな調子ですから、諦めますよ」

確かに新作ケーキは食べてみたいが、それよりこの場に長時間居る方が危ないと考えた俺は適当な理由をつけて帰ろうと、扉に手をかける。

「まあまあ、そんなに急がなくてもいいんじゃないかい？」

だが、手をかけた直後、いつの間にか俺の後ろに立っていた土郎氏に両肩を掴まれる。こっちは簡単に後ろをとられると、どこかすが

すがしさを覚える。

「申し訳無いですが、本当に帰らなきゃいけないんですよ」

「……それは本当なのかい？」

あの優しそうに見えた土郎氏から、有無も言わさない威圧感を持った低い声が発せられる。怖いね〜（棒読み）。

「……分かりましたよ。少しぐらいなら大丈夫です」

「そうかい？ いやあ〜、すまないね〜」

そうして、半強制的に連れて行かれた場所が。

「この道場ってわけ」

「どうしたんだい？」

「いや、たんなる独り言です」

さて、長つたらしい説明も終わった事だし……そろそろこの状況を打破する作戦を考えるとするけど、相手が相手だし……。

「……力業しか無いかな」

第八話 「主人公、ついてない」「ああ、特に今日はな……」（後書き）

「……さて、京平が全治2ヶ月という重傷を負ったので変わりにこの方」

「京平の母こと菅原 菜摘！ここに参上！」

「わあゝ、パチパチ」

「え、なんでそんなにテンション低いの？」

「苦手だから」

「即答!?!」

「まあそんな事より、とうとう次の章から京平が戦いますね」

「京ちゃんが戦うなんて……お母さん感動！」

「感動しているところ悪いんですが、正直な意見としてどっちが勝つ

と思います?。」

「京ちゃんに決まってるじゃない!?!」

「でも、士郎氏も結構強いと思うんですが……」

「どんなに強い強い言っても、所詮は人間。人間である限り京ちゃんには勝てないわ」

「うわゝ急にシリアスな雰囲気か漂ってる」

「さて、これ以上話すとネタバレになっちゃうからお開きにしましょうか」

「そうですね。それじゃあ皆さん」

「「「おひなびん」」」

第九話 「主人公、戦う」「恨むぞ、安眠……」(前書き)

「三ヶ月か……長かった」

「何があつて、こんなに更新が遅れたんだ？」

「実は九月に入ったあたりで全部書き終えてただけ……」

「まさか!？」

「やっぱり気に入らないから、全部消しちゃった(笑)」

「(笑)じゃねえよ!!何がお前をそうさせたんだよ!！」

「人間、過ちの一つや二つ……誰でも持つてるもんさ……」

「……ダメだこいつ。早くなんとかしないと……」

「皆様、長らくお待たせしました。それでは魔法少女リリカルなのは ハーレム?チート?ふぎや……フラグ乱立?そんなのは全部

あいつがやる事だ」

「啗んだ！」

第九話 「主人公、戦う」「恨むぞ、安眠……」

（九龍 side）

「……行くぞ！」

目の前にいるなのは兄、恭也（なのは大好きロリコン青年）が木刀を握りしめ、俺に突撃してくる。それに対して俺は木刀を腰にさし、居合いの構えをとる。

「なっ！！」

それを見た恭也は、足を止めすぐさま俺と距離をとる。エイミイから聞いてた通り流石は、小太刀二刀御神流、継承者、簡単には勝たせてくれない。

「ふう、危ないな。まさか居合いが出来るとはな……」

「……後一步踏み出していたら俺が勝ってたんだがな……流石は、小太刀二刀御神流、継承者という訳か……」

「小太刀二刀御神流、っという言葉に反応して、俺を睨む恭也。」

「……貴様、いったいそれをどこで……」

「知りたかったら……俺を倒してみな！」

俺はそう叫び、居合いの構えのまま恭也に向かって走りだそうとした刹那、何かが粉碎したような強烈な爆裂音が道場に響いた。

「すずか side」

開いた口が塞がらないと言うのはきつと今の状況を言うのかもしれない。

九龍君がなのちゃんのお兄ちゃんに向かって行った時、突然凄いい音が道場に響いて、みんながとても驚いた。勿論、九龍君となのちゃんのお兄ちゃんも驚いて、二人とも動きを止めた。

私となのちゃんとアリサちゃんは、何が起きたのか分からなくてただ茫然としていたけど、ふと、隣に座っていたなのちゃんのお姉さんを見たんだけど、なのちゃんのお姉さんはある一点だけを見つめて顔を青ざめた。

私はその視線の先を追った。

「…え？…あ」

そして私は見てしまった。

「あ…あ…ああ…」

私となのちゃんのお姉さんの視線の先には、さっきまで元気だった菅原君が

「き、きやあああああ！…！！！」

頭から血を流しながら、道場の壁にめり込んでいる姿を。

「京平！？」

私の悲鳴から少し遅れて、九龍君が菅原君の名前を呼びながら菅原君に近づく。

「父さん！どうしてこんなこっ！？」

なのちゃんのお兄さんはなのちゃんのお父さんに詰め寄るけど、振り向いたその顔を見て言葉を詰まらせた。それもその筈、だってなのちゃんのお父さんは、無、表情だったんだもん。

「と、父さん……？」

なのちゃんのお兄さんは戸惑いながら、もう一度なのちゃんのお父さんと呼ぶ。すると、無、表情だったなのちゃんのお父さんが、みるみる青ざめた表情に変わっていく。

「き、恭也……あ、あ……ぼ、僕は一体なんて事を……」

木刀から手を離し、両手で頭を抱えるなのちゃんのお父さん。

「……救急車……そつだ救急車呼ばなきゃ！」

少しだけ冷静になったアリサちゃんが慌てながら懐から携帯を取り出そうとしたけど、信じられない事が起きた。

「……痛い……」

壁にめり込んでいた菅原君がそう呟くと、まるで何事も無かった

ように、壁から抜け出した。

「あゝ、痛かった。土郎さん、いくらなんでも手加減してくださいよ」

余りに平然と話している菅原君にみんな呆気にとられた。壁にめり込んでその程度つて菅原君は一体何者？

「え〜と……京平君？」

「なんですか恭也さん？」

「その…大丈夫なのかい？」

「大丈夫？ああこの頭の傷ですか？こんな九龍につきあわされていろんなトラブルに巻き込まれた時のケガの方が、よっぽど酷いですよ」

皮肉たっぷりにそう言い切る菅原君。そして、その言葉に反応して視線をあらぬ方向に向けて口笛を吹き始める九龍君。どうやら九龍君にも心辺りがあるらしい。

「ちなみに一番酷かったのは全身を鉋で」「いや、言わなくていいよ  
そうですか？」

その後、当然ながら菅原君は病院に行くと言って、帰っていった。  
菅原君が帰った後、アリサちゃんはボソツと「…今度から少し優しくしてあげようかしら…」って呟いてた。

〈京平 side〉

正直、今は残念な気持ちで一杯です。なぜかって？だってあんなに  
に士郎氏が弱い事に残念。ちょっと本気を出そうと殺気を放つたら  
理性がとんで、本能で襲いかかってきた。あれぐらいの殺気であん  
なになるなんて…まあ終わった事を気にしても無駄か。それより  
も。

「……ラットル君いるんだろ？」

住宅街が入り組んだ道の途中で、俺はまだ微かに流れる血をハン

カチで吹きながら、そう呼んでみる。すると、近くの家の屋根から何かが目の前に落ちてきた。それは一匹のドブネズミだった。

「やっぱりバレてたっすか……」

目の前にいるドブネズミが照れくさそうにそう言う。実はこれがラットル君のもう一つの姿。ラットル君はスクライアー族という遺跡の発掘を生業とした一族で、何故かこんな風に変身出来るのだ。

「まあネズミ臭がプンプンと臭ってきたから」

「ネズミ臭!？」

「うん、余りに臭ってたから殺そうかなと思ったな」

「ひどいっす!？」

「あははは、嘘だって……一割ぐらい」

「殆ど真実!？」

よし！十分にラットル君をいじれたから満足 満足

「うう……兄貴ひどいっす……」

「……冗談はそこまでにして、そんな格好でどこに行ってたんだ？」

「うっ！そ、それは……」

言葉を濁すラットル君。でも大体わかるんだよな。

「……昨日の晩に来た侵入者を見に行ってたのか？」

「っ！？」

凶星かよ。

「知り合いだったのか？」

「……はい……っす……」

「……ケガはしていなかったか？」

「……してたつす。大きなケガじゃ無かったつすけど……」

「……じゃあ助けに行くか？」

そう提案してみるが、ラットル君は首を振った。

「立ち去る前に誰かの足音が聞こえたつすから、きっと大丈夫つす

……」

「……そっか」

大丈夫だと言っている割には、ラットル君の声が元気が無かった。きっとラットル君自身が一番心配しているのだろう。

「それに、あいつを助けたらきっと今の生活が壊れるつす。そんなの……俺は嫌つす……」

……まったく。なんでそんなネガティブ発想なんだよ。

「壊れたら、壊れたときさ」

「え？」

「壊れたら、また作り直したらいいだけだ。絶対に壊れたままにはならない。だって俺達は‘家族’だろ？」

……くさっ！！？めちゃくちゃくさっ！！？。

「……ぷっ！あははははは！！さ、流石にその言葉はないっすよ兄貴ー！！」

「う、うっさいな！自分でも無意識に出たんだよ！！」

「あははははっ！？兄貴ー！！」

腹を抱えて笑っていたラトル君が突然、真面目な顔で俺を呼ぶ。

「……どうやら今日は本当に厄日だな」

この肌へばりつくような嫌な風。どうやらヤバい奴が侵入して

きたらしい。

「それも今度の侵入者はいつもより強そうだし……」

侵入した時は完璧に気配を消していたし、魔力も殆ど感じなかった……でも匂いだけは消せてはいない。もしかしてあえて消してないのか？

「そんな事より早く行かないと周りが危ないっす!!」

「ああ、分かってる……で何処？」

「山の方っす!!」

「了解。じゃあ行きますか」

「」「ユニゾン・イン!!」」「」

……

……

……

「????? side」

「ふむふむ、ここが海鳴市ですか」

見渡す限り木しか見えませんが、こんな所に本当にターゲットはいるのでしょうか？一応確認のために持ってきたスーツケースの中から、ターゲットの写真とその書類を出して、目を通す。

「こんな少年が私の獲物とは……世も末ですね……」

写真に写っているのは、真っ赤な髪的美少年。こんな顔をしているときつと女の子から、モテモテなんでしょうね。

「えゝ…名前は炎 九龍。年齢は九歳。家族は無し。管理局内の階級は一等空士。特殊技能は……これなんと読むんでしょう……?」

私はこの世界の出身じゃないのだから、読み仮名ぐらいつけて欲

しいものです。

「……本当に私が出る必要があるんでしょうか？」

でも依頼主から強いと太鼓判を押すぐらいですから、強いんでし  
ようね。

「やて……」

一通り見終わって写真はポケットに、書類はカバンの中に入れる。  
そして辺りを軽く見渡していざ出発……は出来ないようですね。

「やれやれ、手厚い歓迎ですね」

私がそうぼやくと私を取り囲むようにして、六人の男女が木の影  
から現れた。その中には大の大人から、小学生ぐらいの小さな子供  
までいる。本当に世も末ですね。

「さてさて貴方方は一体どちら様でしょうか？管理局員……では無  
さそうですし……」

私がそう尋ねると小学生ぐらいの小さな男の子が一步前に出る。

「唐突で申し訳ないのだが、今すぐこの世界から出て行って貰えない？」

「出て行け？それはどうしてですか？」

「それは……まあ説明出来ないって事で」

「うーん……突然現れて理由も分からないまま出て行けと言われて、はいそうですか。とは此方としては言えないんですよ……」

「……なら」

すると男の子はおもむろにポケットに手を入れて、何かを取り出しました。それは小さな紫色の球体。

『キョウヘイ、余り無茶したらダメよ。何事も体が一番なんだから』

「分かってるさ、紫月」

取り出したと同時に紫色の球体が喋り始めた。つまり

「成る程、それが君のデバイスですか。しかしおかしいですね？管理局員では無い君がデバイスを、それもインテリジェントデバイスを持っているなんて」

「偶然拾っただけ」

『公園の砂場でね』

「……まあそれは後から聞きましょう」

私は胸のポケットから自分用のカード型のデバイスを取り出す。

「勿論貴方を潰した後で、ですけどね。アグスタ」

「Stand by ready? set up!」

私の声に反応して、黒い光が私を包み込み、バリアジャケットが展開される。

私のバリアジャケットは黒いフード付のマントを羽織り、下には動き安いように黒いジーンズと黒いシャツを着ている。そして武器は大の大人の身長ぐらいある大鎌。

「そう言えば自己紹介をし忘れていましたね。私の名前はカリキム。元時空管理局員、階級は二等陸佐。管理局にいた時は【死神】と呼ばれていました」

ふっ、決まりました。この私の姿を見ればどんな人間でも恐れ

『キヨウヘイ、あの人は自分の事を【死神】とか言って恥ずかしくないのかしら？』

「きつと、あれ、な人なんだ。気にしちゃ負けだ」

『……廚二病？』

「せつかく俺がオブラートで包んだのに、ズバツと言っちゃ元も子もないんだけど……」

……よし 殺しましょう

「バラバラにしてあげますよ」

殺気を何時も以上に放ちながら、私はアグスタを強く握りしめる。だが、そんな私の姿を見ても男の子は少し困ったように頭を掻くだけ。舐められているとしか考えられ無いのですが？

「あゝあ、やっぱり怒ってるよ……めんどくさー!」

『えっ? 私のせい? だって本当の事を言っただけじゃない!』

「本当の事を言っちゃいけない時が、世の中にはあるんだよ!」

『へへ、そうなんだ』

……私、よく我慢しましたよね? 別にこの糞餓鬼共を殺してもイデスヨネ?

「……アハ」

「うわぁ……目が逝ってるよ……紫月?」

『分かってるわよ。 Stand by ready?』

「『set up!』」

糞餓鬼の言葉に反応してバリアジャケットを展開するために、白色の魔力光が糞餓鬼を包み込む。だが、それがどうした!!

「そのまま真っ二つにしてあげましょう」

私は躊躇無く、魔力光に包まれている糞餓鬼にアグスタを振り下ろす。

「ちっ！」

だが、あと少しの所で糞餓鬼のバリアジャケットが展開されて、奴が装備していた見慣れ無い二本の剣によってふさがれた。

「残念でした」

笑顔でそう言ってくる糞餓鬼のバリアジャケットはまるで科学者の白のワイシャツの上に白衣を羽織り、黒のズボンと革靴を履いている。

「珍しい武器ですね……」

「これ？これはお隣の中国っていう国にある柳葉刀りゅうはつっていう武器。結構重いけど、刃が広いから防御によく使っただけだね」

重いと言っている割には、軽々しく柳葉刀をブンブンとふる餓鬼。

「口だけ……では無さそうですね」

「そりゃあ力が無きゃ、あんたみたいなヤバそうな奴に向かう筈がないでしょ？」

「ほう……」

私の実力をたった一撃受けただけで理解するとは……これは糞餓鬼とは言ってられないな。

「申し訳ありません。私は先程まで君の事を口だけの糞餓鬼だと思っていました。訂正しましょう」

「訂正？別にいいよ。しなくて。自分でも糞餓鬼って自覚してるし」

「そうですね。それなら止めましょう」

やはり糞餓鬼は糞餓鬼ですね。人の好意を足蹴にするとはイライラします。

「聞かないとは思うけど、一応最終警告という事で言っておくよ？  
貴方が今すぐにこの街から出て行ってくれるなら、僕達は何もしない。  
でも居続けるっていうんなら、容赦はしない。さあ、どうする？」

そう告げた糞餓鬼は私に柳葉刀を向ける。どこまで人をおちよくれれば気がすむのでしょうか？この糞餓鬼は。

「警告ありがとうございます。そして、その返答は勿論、いいえ、  
です糞餓鬼」

その返答を聞いた糞餓鬼は本当に、本当にほんの一瞬だけだったが、  
「笑った」。その一瞬の笑顔に私は久しぶりに「恐怖」という感情を抱いて「しまった」。

そして、

.....

.....

……

……

…

（京平 side）

「まあまあ持った方かな？」

『7分52秒45。今までの中で一番持ったわね』

悲しいかな。やっぱり結局はこうなるのか……。俺の目の前に気絶して倒れている男（死神さんだっけ？）。

あんなにキレてたりしてたのに10分も持たなかった……。倒して  
いてなんだけど、哀れすぎる。

「で、どうしようするの？」

ラスカが死神さんをつつきながら、訊いてくる。

「いつもみたいに放っておいて大丈夫だろ」

俺にやられた奴らは殆どの場合、その場に放置しておいたら勝手に帰ってくれる。きっと上の奴らに報告しに行くんだろう。ご苦労さん。

「じゃあ帰るか」

「そつつすね」

「ああ、今日も私の出番無しか」

「ラスカ達はまだいい方だぜい」

「我等がマスターと共に戦った事なぞ、片手で数える程度」

「まあ、それだけ少ない事はいい事なんですけど」

そんないつもど通りの会話をしながら、俺達家族は久々に全員一

緒で家に帰った。

「あれ？そついやフーネは？一人で留守番か？」

「「「「「あつ、」「」「」「」

第九話 「主人公、戦う」「恨むぞ、安眠……」(後書き)

「皆様、どうでしたか？」

『相変わらずの駄文ね』

「ぐっぱあー!!」

「あ、安眠が吐血した」

『まあ汚い。キョウヘイ、危ないから触っちゃダメよ』

「俺はダイオキシンか!？」

『まあ、それに匹敵する物かしら?』

「ひ、酷すぎる……」

「え、それでは安眠の代わりに今日のゲストを紹介します。俺の家族の一人、紫月です」

『紫月よ。皆さんよろしくね』

「そついや、何で序盤の方は紫月いなかったんだ？」

『黙れ地球外汚染物質』

「あい……」

「紫月、安眠にキツすぎるだろ。ちなみに序盤に出てこなかったのは、年に二回あるメンテナンスのため、ラスカに預けていたんだよ。デバイスのメンテナンスが得意なのはラスカしかないし」

「なる程。納得」

『誰が喋っていいって言った？』

「あい……」

「うわぁ〜、安眠が滅茶苦茶小さくなって……」

「……それじゃあ『ああ!!』 すいません……」

「……これ以上は安眠がかわいそうなので、今日は終わりますしょう」

『最近は急に寒くなってるから、みんな風邪ひかないように気をつけてね。風邪を引いた分、後が辛くなるからね』

「……マジで母親だな……」

第十話 「主人公、捕獲される！」 「原作キャラに絡まれた結果がこれだよ！」

「それにしても物語が進まないな」

「亀更新だから仕方ない！」

「いや、流石に亀過ぎるだろ……もう一年だったぞ……」

「何が？」

「この小説だよ！」

「えっ！？マジで！ちょっと確認してくる！」

「確認しなくてもわかるだろ……」

「いや、一応だ！それじゃあ……魔法少女リリカルなのは ハー  
レム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部あいつがやる事だ  
…  
…始まります。じゃあ行ってくる！」

「うっせーい。待てよー」

第十話 「主人公、捕獲される！」 「原作キャラに絡まれた結果がこれだよ！」

「お願いですから、釈放して……」

「ダメだ。まだ君が何者か分かるまで、釈放はしない」

「だ〜から〜、只の小学生って言ってるじゃん。それよりここは何処〜？早く帰らせてよ〜」

「少し静かにしないか！」

「うえ〜」

どうしてこうなった。どうしてこうなった。俺は現在、黒いコート？を着た俺と同じくらいの年の黒髪少年に取り調べをされている。そして、その取り調べされている場所はなんと……次元航行艦。管理局が保有している次元を行き来できる戦艦だつてさ あははははは 逃げ場なし〜

さて、どうしてこうなったのか簡単に状況整理してみよう。確かフーネを一人家に置いて死神（笑）さんを倒しに行った後、帰ってみると泣きながら「皆さんどこに行ってたんですかあ〜！」と責められたので、次の日に学校を休んでフーネの行きたい所に連れて行ってあげた。

え？自分が休みたかっただけじゃないか？……まあ少しはそんな

気持ちがあつたと思う……だってさ！帰る時になつたら何時もあのバカ三人組に連れていかれるんだぜ！少しは休みを貰ってもいいじゃん！！……っと話がズレてしまった。

まあそれからフーネと海、山、川、大学、小学校、スーパー等々に連れて行ってあげた。一応言っておくが……デートでは無い！

それで日が暮れて来たから、最後に神社に連れて行ってあげた時に事件は起きてしまった。

神社の長い階段を上った先に見えたのは、巨大な大木がブンブんとその長くてしなる枝を辺りを気にせず振り回していた。そんな光景をまのあたりにした俺は渋々フーネを下がらせて、即刻駆除。だが、そこで俺は大きな過ちに気づく。

……あ、結界……

それからは早かったね。うん。すぐに目の前にいるこの少年が来て連行。フーネはギリギリで逃がす事が出来たけど……あいつらが変な真似を起こさないという保証が出来ない。今すぐにも管理局に乗り込んで暴れそう……あゝ、考えただけで胃が痛い……

「……うん……」

「やっと静かになつたか……それじゃあ改めて聞くが、君は一体何者だ？」

「……只の小学生……」

「只の小学生がこんな事出来る筈無いだろ！」

そう叫ぶと、黒髪少年は壁に設置してあるボタンを押す。すると目の前にモニターが現れ、そのモニターから俺と先程駆除した木の化け物が対峙している映像が映し出される。だが次の瞬間、木の化け物は一瞬にして細切れになり塵になった。

「こんな事を出来るのが只の小学生だと思っかい……？」

「はい」

「……君は一度病院に行つた方がいいな……」

呆れたように頭を押さえる少年。そんな少年に俺は労いの言葉をかけようとした時、少年の後ろのドアが開かれた。そこにいたのは長髪で、髪の色が緑色で不思議なオーラを放つ女性。見た感じ魔力も実力も結構ありそうだし、もしかしてこの船の艦長さん？

「母さ…艦長どうしましたか？」

やっぱり艦長だったか。それよりも母さん？この少年の？……マジで！！全然似てない！

「…いや、世の中不思議な事があるんだな」

「「？」」

ほぼ同じタイミングで同じ方向に首を傾げる二人。成る程。まちがいなさそうだ。

「それより艦長。どうしてここに？」

「いやね。エイミィさんから、クロノが手こずってるって聞いて様子を見にきたのよ」

「エイミィめ…余計な事を…」と苦々しそうに呟く少年改めクロノを見て女性は小さく笑う。そして顔を此方に向けると、満面の笑みを魅せてきた。

「……なんですか？」

「あなた、名前は？」

「菅原 京平です」

「京平君ね　じゃあ早速だけど尋ねたい事があるんだけど……」

「どうして魔法を使えるのかでしたら、何度も言った通り三年前に公園の砂場で拾った宝石に教えて貰ったからです」

「じゃあその宝石は？」

「どこかに落としちゃいました……」

本当は調べられたら面倒なので、フーネに渡してる。きっと大丈夫だろ。

「それじゃあ京平君と一緒にいたあの女性は？」

「母の友達です。外国に住んでたんですけど、つい最近日本に帰ってきたので、母に電話で案内しろと言われまして……」

「理由は？」

「遊びにきたと言っていました」

「成る程……」

そこで言葉を区切ると、俺の目をジッと見つめる。嘘をついていないか確かめようとしているらしいが残念。嘘を突き通すのは結構得意なんでね。

「……話は変わるけどいいかしら？」

「？はい、大丈夫ですが？」

「…実は私達、ある人を探してるの」

「人探しですか？」

「そう。私達が所属している時空管理局、まあ京平君からしたら警察みたいなものだけどね。その本部から一人の女性がいなくなったの」

「いなくなった？辞めたんじゃないんですか？」

俺の質問に目の前の艦長さんは首を横に振る。嫌な予感がポンプンする。

「そのいなくなった女性は、実は犯罪者でね。危ないから隔離されていたの」

犯罪者って……酷い言われようだな。

「でも改善の余地があったから見張り付きで、時空管理局で働いていたんだけど……いつの間にかいなくなっていたの。で、その女性が」

艦長さんがポチツと机にあるボタンを押すと、さっきみたいに俺の目の前にモニターが現れた。そこに写っていたのは紛れもないフリーネの顔。

「フリーネ・ランバルト。ねえ、この顔に見覚えがあるでしょう？」

うわあ、全部知ってたんだこの艦長。性格悪い過ぎるだろオイ！

「さて、京平君。あなたには二つの道があるわ。一つはフリーネ・ランバルトを差し出して、貴方も私達に協力する」

「協力？」

「時空管理局ってね、人手は足りてるのだけど、実力のある人が少ないの。だから優秀な人材が今すぐにも欲しいの。京平君は見た所、優秀そうだし」

「僕は貴様のような奴は反対だな！」と部屋の隅で怒っているクロノ。安心しろ。俺もお前の手伝いをするのは嫌だから。

「それでもう一つなんだけど……フーネ・ランバルトをこのまま匿って私達を敵にするか」

艦長さんの言葉に後ろにいたクロノが自分のデバイスを起動させる。どうやら最後のを選ぶと即刻捕まえる気らしい。流石はラットル君とラスカから聞いていた管理局。汚すぎる。

「さあ京平君。貴方はどっちを選ぶのかしら？」

……黒い。笑顔が黒い。この人本当に正義の味方？どう見ても悪の幹部にしか見えないんだが？

「すみません。少し考えたいので一人にさせてください……」

「……分かったわ」

俺の願いを素直に聞き入れた艦長さんはクロノを連れて出て行った。出て行く前に小さな声で「いい返事を期待しているわ……」とかなんとか言ってたけど……そんなの無理に決まってる。フーネは俺達の家族なんだから。あいつを悲しませる選択なんか取りたく無い。例え管理局と戦争しようとも。九龍や高町と戦う事になっても。だけどそれは最後の手段。なるべくそんな事はしたくない。だからこの場合は……逃げる！

「よし、そうと決まれば」

まずこの部屋の唯一の出入口である扉に近づき、バインドを応用した魔法をかける。これで当分はここは開かない。そして強制転移をするために魔力を溜める。でもこんだけするとそりゃあアライムがなる訳で。

「何をしているの京平君！」

俺の目の前にモニターが現れ、艦長さんが深刻そうな表情で映っていた。

「すみません。そろそろ夕飯の支度をしないと行けないので帰らせ

て頂きます。それと先程の返事はまた今度という事で」

「何を言ってるの!？」

そんな話をしていたら強制転移の為の魔力が溜まったので、最後にモニター越しに手を振ってから発動させた。  
こうして俺はアースラから逃げ出す事に成功した。

.....

.....

.....

くクロノSideく

ふざけている。あんな奴、さつさと捕まえとけば良かった。僕はストレージデバイス‘S2U’を取り出して転送装置へと向かう。

「どこに行くのクロノ?」

どこに行くか？そんなの決まってる。

「あのふざけた犯罪者を捕まえに行きます」

「……止めなさい」

「っ！ー！母さん！」

「分からなかった？京平君はきつと貴方より強いわよ」

あのふざけた奴が僕より強い？      そんな事は有り得ない。

「はあ、まだまだねクロノ。京平君はずっと私達を観察してたのよ」

「観察？」

「ええ。私達が次にどんな動きをするかずっと見ていた。それに合わせて体勢や席の座り方をこまめに修正していたのよ」

「な、なんでそんな事を……」

「いかなる場合や時でもすぐに状況にあわせて反応するためよ……  
…やっぱり彼は欲しいわね」

最後の言葉がよく聞き取れなかったが、何故か母さんは嬉しそうに立ち上がる。

「決めたわクロノ。彼を絶対に管理局に入れるわよ！」

「なっ！」

「彼は絶対に管理局に必要な存在よ。エイミイさん聞こえる？」

すると母さんの目の前にモニターが現れる。

「はい、艦長」

「京平君がどこに転移したか分かる？」

「え〜と……きっと海鳴市です。正確な位置は分かりませんが……  
……」

「それで充分よ。ありがとうエイミーさん。クロノ執務官！」

「はいっ」

「海鳴市に向かいます。準備をください」

「か、艦長自らですか!？」

「貴方一人だと話が難しいですよ。エイミーさん、後は任しても大丈夫？」

「はい。任せて下さい艦長」

「ふふふ……絶対に逃がさないわ……」

そんな物騒な事を呟いている母さんの後ろに夜叉が見えたような気がした。

〜京平Side〜

「……………うん？」

のんびりと夕食を作っていると、急に変な違和感と寒気が同時にきた。

「？京平さんどうしました？」

「あ、フーネ。いやなんか急に寒気が……………」

「風邪でしょうか？」

「いや、一瞬だったから違つと思つけど。あ、これ運んでくれる？」

「分かりました。あまり無茶はしないでくださいよ」

「くくく」

さっきのはなんだったのだろうか？

第十話 「主人公、捕獲される！」 「原作キャラに絡まれた結果がこれだよ！」

「……本当に一年たった……」

「……管理局に捕まった上にこれから先、嫌な予感しかない……」

「そろそろラットル達がなんで管理局恨んでるか書かなきゃいけないと思うのだが、京平はどう思う」

「そんなのは後にしてあの艦長さんフラグをどうにかして欲しいんだけど……」

「やだ」

「うわぁ、なんて清々しい笑顔なんだろう」

「だって少しは主人公の所は見せた方がいいだろ？」

「だからってあの艦長さんは無い！あんな年増にモテても嬉しくない……」

「うふふふ 京平君。誰が年増なのかしら」

「ぎゃあああああ……！！！！……なんているのおおお！？！？」

「あ、俺が呼んだ」

「作者あああ！って艦長さん何を！？えっ！？あつちの部屋に行きましよう？いや、あつちの部屋は休憩室なんですけど？……年上の良さを教えてあげる？何ふざけた事を言っただけで痛い！なんで腕を掴むんですか！ちよつと引きずらないで！作者ああ！助けてええ！」

「年増だろつが、モテる奴は死ねば良いと思うよ」

「うわあああ……ああ……」

「……逝ったな。京平よ安らかに眠れ」

「……アッー！」

「……ちよつと本気でヤバそうだな。ちよつと助けてくるので、皆

さんまた次回お会いしましょう。バイバーイ」

第十一話 「主人公、店を開ける!」「いらっしやいませえええ!」(前書

「やっと更新出来た……」

「あやうく貞操を奪われる所だった……」

「五ヶ月……長かった。ああ長かった!」

「……一応聞くけどなんでこんなに遅れた?」

「……迷走してました。書いてる途中にクロノって誰だっけとか、リンデイさんの口調ってこれであってるか?だとかそもそも魔法少女ってなんだよ!とか……もう訳が分からないよ!!(某外道OBさん風に)」

「……今も充分迷走してるな。それでは、魔法少女リリカルなのはハーレム?チート?フラグ乱立?そんなのは全部あいつがやる事だ 始まります」

「こんなの絶対におもう黙ってる!」

第十一話 「主人公、店を開ける!」「いらっしやいませえええ!」

あの拉致事件から五日目の午前六時。

「ふあ〜……ねむ……」

驚く事にあれから管理局が何かして来る事も無く、普通に平穏な日々を過ごす事が出来た。

学校でも高町が魔法使いである事を九龍が知ったらしく、よく二人がこそこそと授業中に念話で話しているのを時々傍受して聞いている。

それによるとあの二人は管理局の命令でジュエルシードという危険なロストロギアを回収しているらしいのだが、そのジュエルシードを狙う別の魔法使いの金髪の女の子が邪魔をしていて中々回収が進んでいないらしい。

九龍は相手が自分と同じ年である金髪の女の子だと言う事に動揺しており、どうすればいいか迷走している。対して高町の方はその女の子と話し合いで解決したいと思っているらしい。

まあ俺には関係無いが、二人とも死なない程度に頑張ってくれとは思っている。

「ん〜!……よし!それじゃあ準備するか!」

思いつきり背伸びをして眠気を吹き飛ばし、店を開ける準備をする。そう今日はめったに無い貴重な開店日。なぜめったに無いかと

言つとラットル君とラスカの両方が空いてる日が中々無いのだ。酷い時ならひと月まるまる開けない時だってある。だから基本不定期開店なのだ。

「生クリーム、砂糖、牛乳、卵……まあこんだけあれば大丈夫だろ」

冷蔵庫の中身を確認して、作業に移ろうとしたのだが、

「あ、マスター。おはよ、じざいませす」

入り口からやる気のない眠そうな声が聞こえたので、顔を向けてみる。そこにいたのは可愛らしいクマのパジャマを着たアイギスが、眠そうに目を擦りながら立っていた。

「おはようアイギス。どうしたこんな朝早くに？」

「いえ、物音が聞こえたので降りてきたのですが……今日はどれくらい作るのですかマスター？」

「うん……今で確か100本ぐらい作ってるから、あと50本ぐらいは作っておくつもり」

ちなみに前に作っておいた100本はアイギス達にちゃんと魔法をかけて貰って冷蔵庫に入れてあるので、腐ったりはしていない。

「そうですか。それでは私も準備をしましょうか。ふわぁ」

そう言って、とてとてと出て行くアイギス。その姿を見送って俺は作業に移る。

アイギスが言っていた準備というのは、近所の家やアパートにピラを配る事。そうしないと後々面倒くさい事になってしまう。

前にピラが間に合わなくて配らなかつた時があつたのだが、その時は近所の人だけでなく市外の人までもが、わざわざ苦情を言いに来たもんだ。

そんな騒動が起きたので、後からネットで調べて見るとなんと、  
‘幻の名店！行かないきゃ損！’や‘あの翠屋も越えた！？不定期開店の究極の店！’という風に、何故か大袈裟に書かれていた。いや嬉しかったのだが、流石に大袈裟過ぎる。あの翠屋を超えるとか無理に決まっている。

「おお、今日もマスターは早いな」

「マスター、おはよう」

そんな事を考えていたら、今度はオハンとイーギスが厨房に入ってきた。いつも起きるのが一番早い二人には市外のピラ配りをやって貰っているので、二人とも私服に着替えている。

「おはようさん二人とも。遠方のビラ配りは終わった？」

「全部配り終えたぜい」

「それとマスター。ポストの中にこんな物が」

イージスはそう言ってポケットから白い封筒を取り出す。なんだろう？両親からか？

「ん？」

受け取って裏を見るも差出人は書かれていない。……嫌な予感がする。

だが開けないと始まらないので、ビリビリと手で破いて中身を取り出す。入ってたのは折り置まれた一枚の便箋。そして何故かハートマークのシールが大量に貼られている。

「……捨てていいかこれ？」

「い、一応中身を読んだ方が良さそうぞマスター」

「だけどオチが大体分かったんだが……」

「諦めたらそこで試合終了だぜい」

「……はあ……」

嫌々だが、便箋を開いて中身を読んでみる。

菅原 京平様へ

今日のお昼ごろ其方にお伺いいたします。あなたの大事な友達と共に。

アースラ艦長リンディ・ハラオウン

「……はあ、やっぱりそうくるよな……」

この文章から察するに大事な友達というのは九龍と高町。つまり俺の事を二人に教えたのだろう。

まあ俺の周辺を調べれば二人の事はすぐに分かる事なのだが、流石に早すぎだろ管理局。その二人は奥の手として出してくるだろうと思っていた俺の予想を見事にぶち壊してくれた。

「マスター？」

「……イージス、すまんが予約席を出しといてくれるか？椅子は六でいい」

「……承知した」

空気をよんでくれたのかイージスは何も言わずに準備をしにいつてくれた。

「オハンはこの家の周りに対結界用の魔法をかけといてくれ」

「了解したぜい」

オハンも何も聞かずに二階へと上がっていく。  
今までが平和だった分、今日は厄日になってしまった。

あのキョウヘイとかいう犯罪者が逃げてから五日目の今日。僕は母さんと炎と高町なのは、そして炎のユニゾンデバイスであるサラさん達と共にあの犯罪者の家である‘HOME’という洋菓子店へと向かっている。勿論奴の店に洋菓子を買に行く訳ではない。奴を捕まえるためだ！

母さんの命令でこの五日間は奴の周辺をくまなく調査した。最初は余り乗り気では無かったが、調べて行く事に驚くべき事が多数分かった。

まず奴の周りにはフーネ・ランバルト以外にきな臭い奴らが居候しているという事。

その構成は男三人と女二人。

全員尾行しようとしたが、すぐに見失ってしまう。魔法を使って牽制してみようとしたが、のらりくらりと牽制するタイミングが上手く掴めなかつたので、諦めた。次に結界をはってみたが、他の一般人のように結界の中に入らない。

他にも色々な方法で奴らを挑発してみたが、すべて失敗に終わってしまった。それを母さんに報告すると、母さんは仕方が無さそうにある計画を立案した。

その計画は炎九龍、高町なのはの二名と共に最後の説得に向かうという内容だった。

この二人がああ犯罪者の友達とは知っていた。だがそんな簡単に説得出来るだろうか？僕は心配して母さんに進言したが、心配ない

！の一点張り。

艦長がそう言うのならばしょうがない。

こうして計画は若干の変更があるが、ほぼそのまま実行される事になった。

若干の変更というのは人数。あの犯罪者が強敵だという母さんの意見により、説得にむかうのは僕、母さん、炎、高町なのはの四名と炎のユニゾンデバイスであるサラさんの計五名。このメンバーが決まった時はこれは過剰戦力だ、という意見が多数でたが、そこは母さんの鶴の一声で全て収まってしまった。それにしても母さんは奴の事を過大評価し過ぎていないか？

「どうしたクロノ？」

今までの経緯を頭の中で思いおこしていると、隣で歩いている炎が心配そうに声をかけてきた。

僕と炎は昔、他の世界で事件が起きればよく一緒に捜査をしていた。なので今では良い友達だ。

「いや何でもない。それより炎こそ大丈夫なのか？あいつはその…」

「分かってる。だから話し合いで解決したい……京平はきつと……  
…騙されてるんだ！そうじゃなきゃ犯罪者を匿ったりしない！」

つらそうな表情でそう話す炎。炎と奴が友達であると知ったのは

奴を最初に調べた時にすぐに分かった。

だから僕は今回の作戦に炎だけは参加させるべきでは無いと進言したのだが、母さんは聞く耳を持たなかった。

「九龍様……」

「九龍君……」

そんな炎を見て心配そうに呟く後ろの女性二人。片方は炎のユニゾンデバイスであるサラさん。メガネをかけ、髪を三つ編みにし、何故かメイド服を着ている。もう片方は炎のクラスメートで友達の高町なのは。髪をツインテールに結わえ、動きやすそうな服装をしている。

勿論二人共に美人、美少女だ。どうして炎の周りには美人、美少女しか集まらないのだろうか？

「……………」

そんな中、いつもの艦長服から私服に着替えている母さんは物思いにふけっっているのか、青い空を眺めながら炎の隣を歩いている。炎も空気を読んでいるのか、母さんの顔をちらちらと見るだけで話しかけない。

実はこれは今日に限った訳じゃない。

あいつに会ってから母さんはよく物思いにふけるようになり、あいつを固執し続けるようになった。僕はいつもの母さんに……いや

艦長に戻って欲しい。だから

く九龍Sideく

リンデイさんに京平を捕まえる！と言われた時は何を言っているのか理解できなくて、時が止まったように感じた。だがリンデイさんがこと細かく落ち着いて説明してくれたおかげで大体の事情を理解する事が出来た。

ズバリ京平は騙されている。

それも相手は管理局から逃げ出した極悪人や何か裏がありそうな怪しい奴ら。きっと京平の優しい心につけ込んで悪事を働いている

に違いない。待つてるよ京平！絶対に助けてやる！！……と思っ  
ていた時もありました。

「な……なんだあれ……？」

歩いて二十分、現在京平の家が見えるところまで来たのだが、京平  
の家の前に見えるのは多くの人、人、人。

「あ、あの行列はいつたい……？」

「すごい……」

サラとなのはが驚嘆の声をあげ、リンディさんとクロノはポカン  
と口を開けた状態から動かない。それにしてもあの行列……軽く七  
十人はいそうだな。

「やつほー、待ってたよー」

突然聞き慣れた声が後ろから聞こえ、俺達はすぐさま振り返る。  
そこに立っていたのは紛れもない俺の親友。

「京……平……」

「ん？なんだよ九龍。そんなに俺が珍しいか？いつも学校であつてるだろ？」

いつものように軽口を叩いてケラケラと笑う京平。服装は英語のロゴ入りの白いＴシャツに青のジーンズ。手には大量の買い物袋。普段から見かける姿とまったく変わらない。いつも通りだ。だがいつも通り過ぎる。

「……………京平……………お前本当に……………」

「???何が、本当に、なんだ？俺はいつもの俺だぞ？」

「黙れ犯罪者！」

俺と京平の会話を遮ったクロノが突然叫ぶ。

「え〜と……………誰？」

「っ!?!?き、貴様っ!?!?!?!」

京平の返答に怒りを露わにしたクロノは懐から待機状態の「S2U」を取り出す。

「止めなさいクロノ！」

そんなクロノを見ていたリンディさんが一喝する。その声に京平に襲いかかろうとしていたクロノが止まる。

「…………でも艦長……奴は…………」

「クロノ執務官、私達は闘いに来たわけではありません。あくまで話し合いにきたのです。それを忘れないように」

「…………分かりました」

渋々と「S2U」を懐にしまうクロノ。リンディさんは「S2U」がしまわれたのを確認して、京平を見詰める。

「ごめんなさいね京平君」

「別に構いませんよ。それに挑発したのは僕ですので、謝るのは寧ろ僕の方ですよ」

「そう言ってくれて嬉しいわ。それで私達が今日来た理由は……分かるわね?」

リンディさんの問い掛けに京平は疲れたような大きな溜め息をはく。

「まあ立ち話もなんですし僕の家で話しましょう。お茶ぐらいは出しますよ」

京平の言葉にリンディさんが頷き、つられてその後から俺達も頷く。

「それじゃあついて来て下さい」

京平はそう言って俺達の横をすり抜けて家へと向かう。俺達はその後ろについていった。



しんない  
「

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5893j/>

---

魔法少女リリカルなのは ハーレム？チート？フラグ乱立？そんなのは全部

2011年7月21日18時43分発行